
IS 裏方の赤い人

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 裏方の赤い人

【Nコード】

N1290Y

【作者名】

ネコ削ぎ

【あらすじ】

世界をまたいで願いをかなえるなんて出来ませんよ。代わりに私の居る世界の人達の願いをかなえてあげましょう。色々なところにありますから声をかけてください。願いをかなえたら退散しますから。ちなみに目印は赤色ですから。

注意……この作品はいまだに迷走中で執筆したので、場合によっては更新されない可能性があります。

こうして皆が壊れてく（前書き）

場合によっては更新されないかもしれません。評価＋個人的な気持ちでがんばりますが。

こうして皆が壊れてく

ぼく達はとても仲が良かった。
とてもとても仲が良かった。

本当に仲が良かった。

仲が良かったんだ。

だからだろう。

今日も仲良く遊んだんだから、明日も今日と変わらず仲良く遊ぶんだろうと。

当たり前のように、疑問などある訳もなくそう思った。

実際に明日も、そのまた明日も仲良く遊んだ。

当たり前のように、明日もそうなることを疑わずに。

「トールカ、箒。行こうぜ」

そう言って目の前で……ぼくが轢かれた。

こう、ポーンと。

本当はもっと鈍い音が響き渡った気がする。

世界が止まったような錯覚を覚えた。周りの人達はちゃんと動いていたが。

けたたましい悲鳴がぼくの耳に飛び込んできた。

隣にいた友達にも聞こえたのか驚いて尻餅について、泣き出してしまった。

視線の先にある動かなくなった人を見て、ぼくは半身を失ったのだと分かった。

夏のある日のことだった。

織斑十夏は双子の兄である織斑一夏を目の前で亡くした。飲酒運転

の軽自動車に轢かれた。一夏の体重を感じさせないくらい簡単に。病院で制服姿のまま、お姉ちゃんはショックで崩れ落ちた。後は淡々と進んだ。何があったのか分からないほど淡々に。

全てが終わった後なのに、ぼくの家は暗かった。何日も何日も。天気が良くても暗かった。

ぼくもお姉ちゃんも学校を休んで家にいたので、その暗さがぼく達二人が原因だと気づくのはそう遅くなかった。

このまま家にいるのが辛くなって家を出て、近くの公園ですつと時間を潰していた。

どうすればお姉ちゃんが笑顔になるのか？ 一夏が戻ってくれば笑顔になるのか？

同じことを延々と考えて、ふと顔を上げると赤色が目の前に広がっていた。

赤色はぼくの目線に合わせるためにしゃがみこんで微笑む。

……赤い女の人だ。

首が隠れる程度に伸ばされた髪は真っ赤。ぼくを見つめるその瞳も赤い。日本人ではない褐色の肌。修道服を着ているが、それも赤色。そんな赤い人はぼくを穴が開くほど見つめている。ぼくはどうすれば良いのか分からず固まってしまった。

「君さ……」

沈黙を破ったのは赤い人だった。

「何か困ったことあるでしょう？」

何処までも明るいと思える声色。ぼくの家の暗さとは大違いだ。

赤い人の声に、ぼくは事故で一夏を亡くしたことを話した。
全て話し終えても、赤い人は微笑んだままだった。

「私がさ、その一夏くんを生き返らすことが出来るって言ったらどうするかな？」

明らかに嘘をついているだろう。死んだ人を生き返らすことなんて出来るはずがないんだから。

ぼくの目が胡散臭いものを見る目だと気が付いたのか、赤い人はクスツと笑う。まあ、信じないよねと言いながら。

「でもね、私は人の願いをかなえることが出来る魔法使いだから。実は出来ちゃうんだよなー」

魔法使いと言う言葉でぼくが納得すると思っていたのだろうか？
ぼくが納得していないのを知っているか分からないが、赤い人は公園内に植えてある枯れた桜の木に向かっていった。その木の前にたどり着くと、両の手のひらをくつつける。

「枯れ木に花を咲かせましょう」

その言葉が発せられると、木は応えるように桜の花を咲かせ始めた。あり得ない光景にまるで花咲爺さんみたいだと思ってしまった。そして、本当に魔法使いだとも思った。

「凄いでしょ。信じる気になった？」

咲き誇る桜の木から離れて戻ってきた赤い人は変わらず微笑みを浮かべていた。

季節はずれの桜の存在に、ぼくは赤い人が本当に願いをかなえてく

れると信じた。

「本当に一夏を生き返らしてくれるの？」

もしぼくが大人なら手品が何かだと鼻で笑い信じなかっただろう。子供だから信じてしまった。

「ふふふ。やってあげましょう。その代わり——」

「その代わり？」

「きみの命を貰うけど良いかな？」

——え？

「一人の人間を生き返らせるんだから、これくらいの対価は貰わなくちゃね」

ぼくのいのち？

「ただで願いをかなえてくれると思った？　だとしたら甘い。ちゃんと対価はいただきますよ。その証拠にさ」

赤い人が先ほどの桜を指差す。

少し前まで咲き誇っていた桜が見る見る内に花びらがなくなっていき、枯れていく。

「すぐに咲かせてあげたから、すぐに枯れてもらったんだ。きみの場合は一夏くんを生き返らせる代わりに、きみの命をいただくってことで……どうする？」

ぼくの回答を赤い人はずっと微笑んで待っていた。
初めて、笑顔が怖いと感じた。とても怖いのだと。

気づいたらぼくは赤い人から逃げ出していた。

こっして皆が壊れてく2

目の前には鏡がある。とても大きな鏡。ぼくの体が全部映るほどの鏡だ。

ぼくが手を上げれば、鏡に映るぼくも同じタイミングで手を上げる。笑えば笑う。怒れば怒る。泣けば泣く。

面白いと思えるほどに一緒に動く。

まるで双子みたいだ。

……双子？

ぼくは一夏と双子。見た目は同じ。初めて見た人はどっちがどっちか分からないほどに。

鏡に映るぼくは相変わらずぼくと同じ動きをする。

自分の動きを映し出す鏡に飽きてきた頃、不思議なことが起こった。ぼくが何の動作をしていないのに、鏡に映るぼくが急に泣き出したのだ。

ゾツとしてしまった。

しばらく泣いたぼくは、今度は口をパクパク動かし始めた。音が聞こえず何を言っているのかはまったく理解が出来ない。

パクパクパクパク。

パクパクパクパク。

鏡に映るぼくは一体何を伝えようとしているんだろう？

「何を言いたいのか？」

言って後悔する。鏡に語りかけるなんて変だ。いくら鏡に映るぼくが勝手に動くからといって、話し合えることはないんだ。ぼくは鏡に背を向けて立ち去ろうとする。

「……ど……いき……」

何処かから途切れ途切れの声が聞こえてくる。聞いたことのある声だ。

「どうし……いき……なかった……」

先ほどより言葉を聞き取ることが出来た。何処から聞こえてくるかも。

目の前の鏡だ。鏡に映るぼくが喋っているんだ。

「どうして、俺を生き返らせてくれなかったんだよ」

聞いたことのある声。ぼくの声だ。同時に一夏の声である。鏡に映る人物もぼくであって一夏でもある。

「どうして、願いをかなえてもらわなかったんだよ？」

一夏がぼくに語りかけてくる。あの日、ぼくが赤い人から逃げ出したのを責めてくる。

「かなえてもらおうとしたよ……！」

かなえてもらおうとしたんだ。でも、代わりにぼくの命を貰うなんて言ってきたんだ。

「違う。逃げたんだよ、お前は。家族の俺を見捨てたんだ。千冬姉が泣いているのを止めようとしなかったんだ。トーカ、お前が自分の命をあげていれば俺も千冬姉も笑うことが出来るんだぞ」

ぼくは一夏を見捨てた訳じゃない！！ 千冬お姉ちゃんが泣いているのを止めようとした！！

「なら、生き返らせる。命を渡すんだ」

今度こそ鏡に背を向けて逃げようとする。

しかし、振り向いた先にはぼくを、一夏を映し出す鏡が存在した。右を見ても、左を見ても、上を見ても下を見ても、ぼくを映し出す鏡があった。

「生き返らせる生き返らせる生き返らせる生き返らせるイキ返らせロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロ」

ぼくを囲む全ての鏡から際限もなく声が聞こえてくる。ぼくを責めるように。

騒音に混じり、すすり泣く音も聞こえ始めた。

助けて、助けてください！！

ぼくの叫びは騒音の中に空しく消えていった。

助けて！！ 助けて！！ 助けて！！

何度も何度も叫ぶ。鏡に映る一夏から逃げ出たくて。

目を開ければ見慣れた空間にいた。ぼくと一夏に与えられた部屋だ。なんてことのないぼく達の部屋。空間を彩る装飾品の類も年相応の玩具もない質素な部屋。

そんな部屋の片隅でぼくは眠りから目覚めたんだ。換気のなされていない部屋は淀んだ空気に満ちていて、具合が悪くなりそうだ。

開けられていないカーテンが昼夜を問わずぼくを外の世界から遮断してくれる。

そのカーテンに日の光が当たっているから、まだ夜じゃないんだ。みんな学校で何をしているんだろう？

最近、学校に行っていないから今何を学んでいるかも分からない。箒ちゃんがプリントを持ってきてくれるけど、目を通したことがないからそこから何を学んでいるかも分からない。

赤い人から逃げ出した日から、ぼくは学校を休みがちになった。周りがぼくを責めている気がするんだ。

どうして、一夏を生き返らせなかったんだって。

クラスみんなと親しかった一夏の代わりにぼくが死ねば良かったんだって。

気づけば少しずつ登校を拒否するようになって、最終的に引きこもってしまった。

一日中自室で睡眠をとる毎日。寝れば夢を見て、それで目を覚ます。十分な睡眠がとれていないのでまた寝て、また目を覚ますの繰り返し。

——ふんぞり眠る。もうひと眠りつめ。い。

こっして皆が壊れてく3

起きては寝て、起きては寝て。

寝れば嫌な夢を見ることは明白なのに。

でも学校に行こうとは思わない。

行けばみんなが責めてくるから。

直接責められたことはないけど、きっとみんなはぼくを責める。

起きてすぐに寝てまたすぐ起きる。

長く起きているのはお腹が減った時とトイレに行く時。

まだそんなに経った訳じゃないのに、お姉ちゃんの顔が思い出せなくなった。名前は思い出せるのに。織斑千冬と言う名前だと。

……どうでも良いか。

そつえば、いまだに箒ちゃんがプリントを届けてくれるらしい。少し嬉しいけど、それで嫌な夢を見なくなるわけじゃないから。

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。

時計を見るとまだ一時間しか経ってない。

やっぱり変わらず嫌な夢だ。

どうにかしてあんな夢を見なくてすむ方法はないのかな？ もしくはいちいち夢に脅えない様にならないかな。

段々と涼しくなってきた。寝汗をあまりかかなくなってきたので起きた時の不快感が一つ減った。

世の中は夏から秋に変わったんだろう。

ぼくはずっと一夏に囚われてるのに。
どうにかならないのかな？

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。

時計を見るとまだ一時間しか経っていない。
何度見ても嫌な夢だ。

いい加減にこの夢を見なくてすめば良いのに。
高い所から飛び降りればもう夢を見ないですむのかな？ それとも
永遠に夢を見続ける結果になるのかな？
そつえば最近、家から気配がしなくなってきた。お姉ちゃんが帰
ってくるのが遅くなった気がする。

……どうでも良いか。寝よう。

……また起きる。

時計を見るとまだ一時間しか経っていない。
もう……こんな夢は嫌だ。

いい加減にいい加減にいい加減にしてほしい。もう過ぎたことなん
だ。いつまでも夢に出てきて。そういうふうになっちゃったんだか
ら。諦めてよ。ぼくも酷い目にあっているんだから。

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああ！！

……どうでも良いか。寝るしかないんだから。

……また起きる。

暖かい何かがぼくの頭を撫でてる。優しい手つきだと思う。

確実にお姉ちゃんの手じゃない。だって、お姉ちゃんは現実でも夢の中でもぼくを助けてはくれないから。

だったらこの手は誰だろう？

パチッと目を開けると、視界一杯に赤色が飛び込んできた。

「おはよう。不法侵入については勘弁してね」

あの時、公園で出会った赤い人がぼくの顔を覗き込みながら頭を撫でていた。

久しぶりに見たけど赤い。

あかあかあか、全てが赤い。

赤い髪に赤い瞳、赤い修道服。肌は褐色で日本人ではないだろう。

「……なんで？」

無意識の内に出てきた言葉。

「なんで？ ああ、それはね。きみの願いをかなえてあげるために来たんだよ」

願いをかなえる？ また一夏を生き返らせる願いを。

「かなえてほしい願いを言ってごらん。限界はあるけど、私のかなえられる願いなら一つだけかなえてあげるよ」

とても明るい笑顔をぼくに向けてくる赤い人の声も相変わらず明る

いものだった。

怖いと思うけど、同時に嬉しくも思う。

まだ、ぼくを気にかけてくれる人がいるんだ。

「なんでも良いの？」

「一夏のことじゃなくても？」

「なんでも良いよ」

「なんでも良いの？」

「なんでも良いよ」

「じゃあ……」

この願いをかなえてほしい。もう嫌だから。

出会いに感動などありはせず1

時間が経つのはとても早く、記憶に残らないくらいに薄っぺら。いつの間にか高校への進学を果たしていた。

あの時とは違い、教室の中がとても静かだ。教室の外の様々な音が鮮明に聞こえるくらい。がやがやと騒がしいよりは静かな方が良い。

何をするでもなく、ただ前を向いている俺の視界に入るのは少し子供っぽい先生。

眼鏡とオドオドした感じで教師に向いてはいないだろう。あくまで表面を見ただけなのでまだ断定は出来ないが。

その先生はこの空間に充満している空気にどうすれば良いのか判断がつかないようだ。

きつと今までの新入生の感覚とは違っただろう。この先生が新任の教師でないのならだが。

「そ、それでは皆さん、一年間よろしく願いますね」

意を決した先生はニコッと笑ってから口を開く。その笑顔で発した言葉は典型的な内容のものであった。

別に過激な発言やオリジナリティーを求めている訳ではないから典型でも構わない。典型的なものは緊張した雰囲気であっても接しやすいものだから。

問題は先生の挨拶に対して誰もアクションを起こさないことだ。恥ずかしいのなら仕方がないが。

おかげで先生はうるたえてしまった。

俺個人に挨拶した訳ではないが、軽く会釈を返す。頷いただけだが。

俺だけ反応したのが目に入ったらしく、先生はなんとか持ち直した。先生はクラスの一人一人に自己紹介をさせ始めた。

入学早々にクラスの名前を知る機会が与えられたのだ。

周りが次々に自己紹介をしていく中、俺は何もせずに前だけを見ていた。

ふと、教壇に立っている先生と視線が重なった。

「あ、えっと。次は織斑くんの番ですよ」

どうやら自己紹介の順番が回ってきたから此方を見たようだ。

自分が座っている席から立ち上がり、後ろを振り向く。

視線が自分に集まっているのを理解した。

視線の理由は簡単だ。俺の存在がこの学園において異質なものであるから。

俺が入学した学校。名前をIS学園と言う。ISと言う兵器の全てを教える教育機関。ISは原則女性しか動かせない。

俺が此処にいることが珍しいということだ。

……どうでも良いか。

自己紹介をする前に、一度教室内の人間の顔を見渡していく。

赤色、金色、黒色、赤色、茶色と様々な髪の色をした人間が興味津々と言った具合でこちらを注目している。

窓側の席に視線を動かすと、知っている顔が此方を見ていることに気がついた。

知っている顔の篠ノ之箒は俺をジッと見ている。

ひとまず視線を外して、自己紹介を始める。

「……織斑十夏です」

言い終わると前を向いて着席。

後ろの方から呆ける声が聞こえ、次に不満の声が続く。別に自身の様々なことを紹介したいと思っていないのだから長々話す意味もないだろう。それに個人個人に任されているのだから、どの長さで止めるかを非難されても困る。

いまだに納得していない面々はいるが、次の紹介者が立ち上がったので終わる。

またもや何もせずに正面を向いていると、教室に誰かが入ってくるのが視界に入った。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。クラスの挨拶を押し付けてすまなかったな」

入ってきたのは織斑千冬。

「諸君、私が織斑千冬だ」

織斑先生が自己紹介をする。

——一瞬の沈黙の後、黄色い声援が教室内に響き渡る。

「きゃー！！本物の千冬様！！」

「ずっとファンでした！！」

隣の教室の迷惑になっていないのか？

織斑先生を見ると、少し嫌そうな表情をしていた。

「全員、落ち着け。お前達はこれからISの基本知識や動作を死に物狂いで覚えてもらうからな。覚悟しておけ」

アイドルみたいな存在がこのクラスの担任なのか。いちいちうるさいことになるのが容易に分かるな。

休み時間になると、他のクラスの学生が廊下の方から此方を覗きこんで来ていた。

別に気にすることはないので、俺は自分の席から離れずに休憩している。

そうすると、俺の席に近づいてくる人物がいた。

「久しぶりだな、十夏」

箒が俺の前に立って挨拶してきた。

俺の名前を呼ぶ時に少しだけ嬉しそうな表情を浮かべた気がする。

「……久しぶり」

お互いにそれ以上何かを語ることはいらない。ただ、黙っているだけだ。

周りで聞き耳を立てている女子達を気にしている訳ではない。箒がどう考えているかは知らないが、俺は再会に言葉は不要だと思っている。純粹に再会を感じれば良いと。無駄にべたべたする必要はない。

箒はずっと俺のことを見るだけ、俺は箒を見るだけで僅かな休み時間が終了した。

出会いに感動などありはせず2

何も語らずに座っているだけ。

だから授業の合間にある小休憩の度にクラスの生徒や違うクラスの生徒が俺を眺めているのには時間の無駄だと言いたい。

別に何をしている訳ではないのだ。何処に興味を引かれると言うのだろうか？

俺に向けられる視線が時折外れて、隣にいる筈へと注がれる。

そんな視線など気にも留めない筈は俺の席の隣で立っているだけ。相変わらず俺も筈も口を開くことはしない。

この状況を見た女子生徒達は俺と筈の仲があまりよろしくないのだろうと推測しているらしい。

別に仲がよろしくない訳ではない。ただ、話をしていないだけ。

おそらく、時間に余裕があるんだ。

わざわざこんな少ない時間で意味のない話をすることや、授業中に教師に目を盗んでこそそとやり取りをしなければならないほどに濃密な時間を過ごそうなど思っていないんだ。

知り合いと沈黙のまま空間を共有できることは幸運なことだ。

小さな幸せとはこういう他愛もないことを言うんだな。

だからこそ、この空気も読めない不届き者が現れたことに興が削がれてしまうのだろう。

「ちょっと、よろしくて？」

空気を引き裂いて現れたのは、白人の女性。金髪で優雅な物腰が育ちの良さを表している。

何故、話しかけてきたのかは知らないが、隣にいる筈が一瞬顔を歪めた。先ほどまでの空気が霧散してしまったからか。

「聞いてますの？ お返事は？」

何事かと周りの見物人が遠巻きに眺めている。あくまでも傍観者を決め込んでいるらしく、誰一人として近づく気配はない。

「お返事も返さないなんて、どういっつもりですか？ わたくしに話しかけられるだけでも光栄なことなので、相応の態度というものがあるんじゃないでしょうか？」

芝居がかった人を小馬鹿にするような態度。わざとらしくて何を言えば良いものか？

俺が沈黙を保っているものだから、目の前の白人女性は勝手に話し続ける。

「わたくしに話しかけられて驚いているのでしたら仕方ありませんね。何せ、わたくしはイギリスの代表候補生にして入試主席でもあるセシリア・オルコットですから」

どうやら自慢がしたいだけのようだ。わざわざ構う必要などない。目の前にいる人物を風景の一つに認識を変更して自分の中に穏やかな時間を作り出す。

ふと窓側に目をやると太陽の光は差し込んでいて、無機質な空間の一部が違ったものになっっている様に感じた。

どうせなら窓側の席が良かった。夏は暑く、冬は寒く感じる事が出来るのが羨ましい。

席替えはあるのだろうか？

「い、いい加減にわたくしの話を――」

教室に響く続ける騒音がチャイムにかき消された。

ああ、次の授業が始まるみたいだ。

机の中から教科書を取り出し始める。どれも分厚い書物でかさばることこの上ない。無駄な部分を省くべきではないだろうか。

「くっ！！　また来ますわ。逃げないことね！！」

勝手に来ておいて勝手に去っていったセシリア。友達がいるのかが気になる。

俺が気にすることではないな。

「十夏、また来るぞ」

箒の方はしつかりと断りを入れてから去る。

千差万別と言うのだろうか？　それとも十人十色と言うべきか？

日本語の難しさを考えていると教師が入ってきて授業の開始を告げた。

教壇に立つのは一、二時間目とは違い織斑先生が担当するようだ。

昔から鋭い雰囲気醸し出している。

刀と言えば満足するだろう。

正面以外がとても打たれ弱い刀。

折ろうと思えば簡単に折れる刀。

「この時間は各種武装の特性について説明するのだが、そのまえに再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス対抗戦の代表を決める。

それなら、先ほど五月蠅く自慢を垂れ流していたあの女に任せておけば良い。適任だろう。

しかし、祭り上げられるのは織斑十夏と言うもの珍しいだけの自分。ブリュンヒルデなんて大層な名前の称号を持つ人物の弟でしかない自分。

死んだ双子の兄の劣化コピーでしかない自分。

いかに自身を低く見ようが、周りは自分勝手な評価を押し付けてくる。俺自身も自分勝手な評価を自身につけているのだが。

「候補者は織斑十夏。他にはいないか？」

織斑先生が新たな候補者の有無を問いかけてくるが、誰も言葉を発しようとはしない。

適当に祭り上げやすそうな人物を一人挙げれば良いのだ。無責任な推薦である。大概の学び舎で行われている分かりやすい無責任。

選ぶ方は無責任に選ぶのだが、選ばれた方はどのような言葉を並べて反論しようとも関係なく責任を背負わされる。無責任が責任を押し付ける。

「他にいないのなら織斑に決定する」

どうやら責任を押し付けられる立場になってしまったらしい。

残念なことだ。仕方のないことだろう。こんな面倒事をやりたがるのはよほどの向上心を持った奴だけだ。

そんなことを思っていると突如、机を力強く叩く音が教室に響き渡る。

「待ってください。納得がいきませんわ！！」

誰の訴えだろうか？ 後ろを振り返る気がないので、声だけで判別しなければならぬ。

数分前に聴いたような声だ。きっとあの女なのだろう。

「そのような男を代表にするなど認められません。わたくしの方が実力があります。珍しいと言っただけで、そのような極東の猿にされてしまったらいい恥晒しですわ!!」

よくもまあそのような言葉の数々を吐き出すことが出来るのだと思うくらいに一人で喋り続ける。

織斑先生も止める気がないのか好き勝手させている。

「——ちよつとあなた、聞いていますの!？」

先ほどからの言葉の羅列はどうやら俺に聞かせるためのものであつたらしい。てつきりクラス中に自身の有能さを伝えたいが故に俺を標的にしていたのだと思っていた。

「お返事ぐらいしなさい!!」

高圧的な態度とはこのことを言うのだろう。暴力に訴えないことが唯一の救いだ。そのうち手を出してくる可能性がない訳ではないだろうが。

「くっ!!」

後ろから授業中だというのに足音が聞こえ、近づいてくる。

踏み鳴らしながら近づいてくる人物は自らの感情を隠すことをしていないようだ。

その人物はわざわざ俺の前まで来る。

織斑先生からの視線を遮るように立つセシリア。

顔は怒りに染まっていて瞳もまた怒りを宿している。

「決闘ですわ!!」

指を差して宣言してくるセシリア・オルコット。
その宣言を認めてすぐに予定を決める織斑千冬。
無断の宣言に両者を鋭く睨みつける篠ノ之箒。
投げかけられた宣言に何も思わない織斑十夏。

——どうでも良いか。

出会いに感動などありはせず3

生まれてから二十歳までの体感時間と二十歳から死ぬまでの体感時間は同じだと言うことがあるのだが、この歳になって時間の流れが早いと感じてしまうとはいかかなものか？

本日の全ての授業が終了した。初日なのでけっこうバタバタしたものと思っていたのだが、案外そうでもないらしい。

今日使った教科書やノートといった勉強道具と総称することが出来る物を鞆の中に無造作に突っ込む。

周りを見渡せば、放課後だけあってそこその数の生徒達が教室に残っている。今日の出来事や思ったことについて話しあっている。俺は別に教室で何かしたいということもないので、鞆を持って教室から出る。

向かうは自宅。

原則としてこの学園の生徒達は寮生活である。

理由はあまり知らない。登校する時間とかを削減して授業時間に当てるとかだろう。熱心過ぎる教育方針だ。あまりの熱さに蒸発していなくなりたいくらいに。

しかし俺は寮への入居を拒否された。部屋割りが決まっていなかったから一週間は自宅からの登校になると。

残念だとは思わない。自宅の方が他人の目を気にしないで好き勝つてができるのだから。

廊下を何の感慨もなく歩く。

この学園を希望して死に物狂いで入学した訳ではないので、何も感じる気にならないのだろう。

そこからグループを作って歩く生徒達を避けたりしながら歩く。

学園内を見て回るほどの関心もないので歩みを止めることもない。

内履きから通学用の靴に履き替えて、校舎の外へと進む。

自宅までの道のりは正常な世界に戻ってきたことを感じさせてくれる。

男性がいて女性がいる。

男の子がいて女の子がいる。

老爺がいて老婆がいる。

一方しか存在しない狂った空間ではない世界。

慣れ親しんだ家にたどり着いた時、冷蔵庫に食材が入っているのが気になった。

気になったが、家に入ってから確認すれば良い。わざわざ此处で悩む必要はない。

家に入ろうと鍵穴に鍵を差し込もうとする。

スツと後ろから伸びてきた手に掴まれて、鍵穴まで手を伸ばすことが出来なくなった。

はて？ 自宅の前で誘拐しようとした猛者なのか。

「お前の帰るところは此处じゃない」

掴まれていた腕が開放されたので後ろを振り向くと、視界に織斑先生が映りこんだ。

学園に寮入りを拒否されただけでなく、肉親に帰宅すら拒否されるとは。どうやら今日はホテルか何処かで一夜を過ごさなければいけないらしい。

「政府特例で寮に入ることが決まった。だから此处に帰ってくる必要はない。着替えと携帯電話の充電器は私の方で持ってきてある」

どうやら強制的に寮に入ることが決まったようだ。情報伝達が遅すぎる。今度は学園に行かなくてはならないのか。良い運動になると思えば良いか。

「戻るぞ」

そう言つて背を向ける織斑先生について行くと、自動車が進めなくなった。

歩いて戻る気分でいたのだが仕方ないと助手席に乗ることにした。

IS学園までは自動車の方が徒歩よりも早く着いた。当たり前のことなのだが。

しかし、やはり簡素すぎて自動車は面白くない。ゆっくりと景色を楽しめる訳でも空気を感ずる訳でもない。ただ、速くて体力を使わないだけ。

車内で織斑先生が何か話しかけてきたのだが、どれもハイカイエで答えられるどうでも良いものしかなかった。

最後に学園内では織斑先生と呼ぶようにと釘を刺してきたのだが、端からそれ以外で呼ぶ気はないので意味のない注意だった。

織斑先生が鍵を手渡してきたので受け取る。織斑先生の表情が嬉しさのような後悔のような不思議なものになっていた。

自身に割り当てられた部屋まで行く。

鍵を開けて入室をする。

部屋の中にはベッドが二つ。そばに誰かの荷物。明らかに相部屋である。

この学園に男子生徒は俺しかいないので確実に女子とのである。この部屋の先住者は俺が来ることを知っているものか？ 知らない場合は面倒事になってしまうことは明白。

一息つくために荷物をそこらに放りなげる。別に取り扱い注意の物が入っていないので。

「誰か……いるのか？」

荷物を投げた音が聴こえたのだろう。奥の方から声が聞こえてきた。扉に遮られているのが何処か聞き覚えのある声だ。

「同室の者か」

扉から出てきたのは箒。バスタオル一枚の。

「……………」

お互いに視線が合う。

どうやら同室は箒らしい。良かったと思う。そこまで気兼ねする必要がない相手だ。

「同室になった織斑十夏だ」

親しき仲にも礼儀あり。幼馴染だからと言って挨拶を省いて良い理由にはならない。

「あ？ え！？ な、なん！！ ええ！？」

俺が此処にいることに驚いて上手く言葉に出来ていない。

自分の格好に気が付いたのか、段々と顔が赤くなっていく箒。

この事態に俺が出来ることは一つくらいだ。

「外で待つてるから終わったら呼んでくれ」

すぐに部屋を出て行くだけ。

部屋の外に出て数秒だろうか？ 数分だろうか？ とにかく少ししてから部屋のドアが開いたので中に入る。

中には先ほどとは違い、寝巻き用の浴衣を着用していて、顔は平常に戻っていた。

「お前が私の同居人か」

「……らしい」

ふむふむと嬉しそうに頷く筈。すぐに真顔に戻るのだが。俺は適当に入って奥のベッドに腰をおろす。

「お、お前から……希望したのか？」

「いいや」

そう答えると一瞬だけ悲しい表情を見せる。

「でも、筈と同室になったことは嫌じゃない。むしろ喜ぶべきことだろう。気兼ねなく過ごすことができるからな」

「そ、そうか。私も幼馴染の方が気兼ねなくいられるから良いぞ」

顔を赤らめて嬉しそうに語る筈は慣れた手つきでお茶を用意し始めた。

ポットに急須に茶葉。必要な道具を出すと二人分のお茶を淹れて、片方を差し出してきた。

熱いそれは心を和ませるには十分なものである。

一日の中でやっと落ち着いた空間を味わうことができたのだ。

小さな世界が砕けて散って1

知り合って暫く経つと、その姿を目で追っていた。

また暫く経つと、アイツに話しかける女子を快く思わなくなっていた。

また暫く経つと、アイツに対して少し正直でいられなくなった。

母親にそのことを聞くと、その子が好きなのねと言われた。

好き……？ 確かにそうかもしれない。一緒に遊びたいし、一緒に剣道で腕を磨きあげたい。

アイツは剣道が駄目みたいで私どころか双子の兄にさえ勝てない。同じ見た目をしているのにアイツは双子の兄みたいに強くない。

学校でアイツは双子の兄みたいに明るくない。別に暗い訳ではないが。

運動もアイツは双子の兄より下。

勉強もアイツは双子の兄より下だ。

クラスのみんなからは、劣化版と呼ばれている。

男ならやり返したらどうだと、一度焚きつけてみたが、アイツは涼しい顔で笑って、どうでも良いと言っただけだった。代わりに双子の兄が怒ったり喧嘩したりをしたが、アイツは困ったように笑っただけだった。

「どうでも良いか」

アイツの口癖。その言葉を聞くと私はアイツらしいなと思う。普通なら腑抜けと怒るところなのに。

見た目は同じ兄と弟だが、女子達は自然と兄に注目する。全てが弟に勝っている兄に。

しかし私はアイツのことばかり目で追ってしまつ。本当に容姿は似ているのに何故だろうか？

いつも当たり前のように一緒にいられるものと思っていた。

しかし……何が起こるかは分からない。

双子の兄である織斑一夏が車に轢かれた。

私の日常が崩壊するきつかけの日。

それから何があつたのか分からない。

ただ、織斑十夏の姿をずっと見ていたのは覚えている。

十夏は暫く学校に来なくなつた。両親に聞いたら忌引きで休まざるを得ないそうで、すぐにまた学校に通うようになるらしい。だから十夏くんが来たら貴女が支えなさい、と母親に言われた。最初は十夏を支えるの意味が分からなかつた。

両親が言つたように、十夏が学校に来るようになった。

でも、前みたいな雰囲気はなくなつてしまつた。周りに対して怯えているんだ。

気づいたら十夏は段々と学校を休むようになってしまつた。終いには学校にまつたく来なくなつた。

私は初めて母親の言っていることを理解できたのだ。だけど理解したのがあまりにも遅すぎた。

私は十夏に会いたくて学校のプリントを届けるのを引き受けた。

家まで着くと、十夏の姉である千冬さんに会つが、十夏に会うことになつた。

何度も十夏の家プリントを届けにいつていると、気がついたこと

がある。

千冬さんの顔色が少し良くなってきたんだ。理由は分からない。そういえば、最近姉さんが「ちーちゃん」が構ってくれないんだよ」って言っていた気がする。関係があるのだろうか。

一年が経ち、学校への期待で胸を膨らませた新入生が入ってきた頃。何の前触れもなく十夏が登校してきた。

誰も声を出すことが出来ないくらいの衝撃。決められた登校時間を大きく過ぎての登場に。

以前に見たときに比べて不健康そうな顔色。

無造作に切られた髪。

少し痩せてしまったその体躯。

少々印象が変わったように見えるが間違いなく十夏だ。

私の努力の賜物だ。

私の想いが十夏に届いた。

私が……十夏の心を救ったんだ。

それからの学校での時間は以前の様にはいかないけど、とても楽しいものになった。

十夏と一緒にいられる。一緒に学べる。一緒に楽しめる。

理由は定かではないが、十夏は表情を表すことがなくなったので最初はどを感じているのかが判断出来なかった。しかし、共に時間を過ごすうちに明確とまでいかないが分かるようになった。

私が十夏を想っているからこそ出来るようになった。姉である千冬さんは十夏のことを理解出来ない。

私だけが十夏のことを想っている。

そんな私にとつての幸せな時間はすぐに砕け散った。姉の造り出したISと言う自己満足のせいで。全世界の崩壊と共に私の世界も崩壊させられた。

保護するだ何だで無理矢理住居を変えさせられ、行きたくもない学校に通わされて、帰ったら知らない無機質な大人達による尋問。篠ノ之博士の居場所を際限もなく尋ねてくる。

そんなことが続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて続いて……。

——気が付いたら赤い人が目の前に居た。

何処を見ても赤い。炎を連想させるような髪に真っ赤な瞳。褐色の肌が日本人ではないことを表している。修道服を着ていることが、それさえも赤い。

与えられた一室で膝を抱えて座っている私の視線に合わせるようにしゃがみこんでいる。

「君は何か願いを内に孕んでいるね。その願いをかなえてみない？」

微笑む赤い人の声は不思議と違和感なく耳に入ってくる。

「ね……が、い……？」

私の望み？ 何を願う？

……十夏。

私は十夏を想いたい。私だけが十夏を想っているのだから。千冬さんでもクラスの奴ではない。私だけが十夏を想っているんだ。ずっとずっと昔から。好きなんだ。好きで好きでたまらないんだ。ただ、感情をそのまま表現することが出来ないだけであって。

「私は――」

――お願いを言った。

小さな世界が砕けて散って2

いつもと変わらない日常が続くものだと思っていた。

元気に走り回る一夏にのんびりしている十夏。二人を守りながら生きていくのだと思っていた。

千冬姉お姉ちゃんと言いながら嬉しそうに学校のことを話す二人を眺めていくものと思っていた。

私の友人の妹に剣道で負けて悔しそうにする一夏とそれをのんきに眺める十夏に苦笑するのだと思っていた。

だから、こんな現実などは思っていなかった。

だから、こんな残酷なことは想像していなかった。

……一夏が事故で亡くなった。

何の冗談だろうか、くだらなすぎると。

でもそれが、現実のものだと気づいた時、いつの間にか私は涙を流していた。

十夏がいる手前、何度も涙を止めようとしたが、涙腺が壊れてしまったかのように止まらない。

学校に復帰した時には、心も落ち着きを取り戻したのか、授業に遅れてしまったなと思った。

けれども、ふとした拍子に一夏の顔が浮かぶのだ。白く、まさに生気を感じない顔が。

気が付いたら、冷や汗が全身から吹きだしていた。もしかしたら十夏もあなってしまうのかも知れないと。

そんな私に気が付いたのか、篠ノ之束が軽い足取りで此方までやってくる。むかつくくらいの笑顔を携えて。

「大変だったね、ちーちゃん。いつくん居なくなっちゃって」

人の心を察することのできない私の友人。俗に言う天才であるコイツは周りに対してあまりに無関心だ。私と一夏、十夏、箒、かろうじて両親を認識できる程度の交流しかない。はっきりと駄目人間だと断言できる。

数日経って、十夏が段々学校を休むようになっていった。次第に家の中に居るのに顔を合わせることがなくなっていった。

怖くなったのだ。目の前で十夏の顔が生氣のない白い色になっていくんじゃないかと。

休むようになって十夏を心配してか、箒が十夏の為に毎日学校のプリントを持ってくるようになった。

十夏を簡単に支えることが出来る箒に自分の心の弱さを思い知らされた気分になった。

そんな私を見かねた束が「ちーちゃんが元気になるように」と何かを発明し始めたが、嬉しいなどとは思わなかった。

家に帰ることに恐怖した私は出来る限り外で時間を潰すことが多くなった。

限界ぎりぎりまで竹刀を振るって現状を忘れようとした。

普段行かないような場所に足を延ばしてみた。

結局は自身の心の弱さを再認識する羽目になっただけで、何かが解決することはなかった。

遅くまで外に出ているので、もしかしたら警察の厄介になるかも知れないと夜の道を歩く。

——家に帰らなければならない。

街灯が点々と照らしている夜道を一人で歩く。
自分が鳴らす足音以外の音はまったくしない。世界に見放された気分になってしまうほどに。

注意力散漫になってしまっていたのだろう。

——人にぶつかってしまった。

「……すみません」

顔を俯かせたままの謝罪。心が竦っていないと言われてもおかしくない。

私の思った通り、ぶつかってしまった人はその場で止まってしまった。

「君は……何か悩みがあるんじゃないかな？」

この薄暗い夜道だと言うのにやけに明るい声だ。

「私が貴女の願いをかなえてあげようか？」

顔をあげるのも気だるいと言わんばかりの速度で目の前の人物に視線を合わせる。

——赤い人だ。

赤く染まった髪に真つ赤に光る瞳。外国の人なのだろう褐色の肌。

赤色の目立つ修道服を身に纏っていた。

新手の宗教勧誘か何かだろうか？

「私の願いをかなえる？」

違和感もなく耳に入ってくる声に私の思考は彼の人物について考え

ることを止めていた。

願いをかなえる。まるでシンデレラみたいな話だ。私がシンデレラ？ 似合わない配役だと思うな。

「そう。簡単な願いであつても難しい願いであつても私のかなえられる範囲の願いなら一つだけ何でもかなえてあげるよ」

ソイツはこのうつすらと暗い世界に似合わない微笑みを浮べていた。

「私は――」

知らぬ間に願いを口にしていた。

十夏が再び学校に行くようになって、束がISと呼ばれる兵器を開発して、私がそれで世界に衝撃を与えて、世界にISが台頭した。

私はあの頃の弱い自分を恥じて、訓練に訓練を重ねていった。

十夏を守るために。自身の弱さを捨てて十夏を守るために。

気が付けば、最強の称号であるブリュンヒルデを手に使っていた。

最強の称号……。やっと私は強くなったんだ。今なら十夏を守ることが出来る。

第二回モンド・グロッソにおいても代表に選ばれた私は大会に十夏を誘った。

「……興味ないからいい」

たったそれだけの言葉。たったそれだけの言葉に私は停止してしま

った。

な、なんで？

どうして？

こんなに努力をしたのに……なんで？

すたすたと自室へと退散していく十夏の背中を見送ることしか出来なかった。

十夏に断られた大会当日。

私は何故十夏があんなに無関心であつたのかに気が付いてしまった。全て私のせいだと。

一夏がいなくなつて十夏も辛い思いをしていたことに気が付いていたはずなんだ。

それなのに自分だけが辛いなどと悲劇を勝手に演じていたのだ。一人よがりの演劇に助演もなにもいなかったのを知らずに。

くだらない小さな願いで立ち直つた私は力を求めた。十夏を失いたくないがために。

だから気がつかなかった。私が強さしか見ていないせいで十夏の心が私から離れていったのを。

十夏を守るなら少しでも話をする時間を作れば良かったただけなのに。ほんの少しでも十夏を気にかけてやれば良かったただけなのに。

過去に戻りたいと思つた。時間が巻き戻せればと思つた。

後悔の念を抱えたままに、私は優勝するしかなかったんだ。

騒動を退けて1（前書き）

唐突ですが、頂いた感想に返信をしていませんがありがたく読ませてもらっています。
戦いは苦手です。

騒動を退けて1

観ている人間と言うのは都合の良い立場にいると思う。誰もが傍観を決め込んで第三者面をしている。喜んで観ているが、自らが責められそうになるとすぐに逃げ出せるように完全に腰をおろしてはいない。

良いよな、観ているだけの人間は。

無機質な空間で俺と箒は待っている。何を待っているのかはもう忘れた。きっとどうでも良い物を待っているからなのだろう。

静寂を貫くこの場所は隣に佇む箒の呼吸音が良く聞こえるほどだ。たぶん箒の方も俺の呼吸音が聞こえていることだろう。

「帰ってお茶でも飲んでゆっくりしたいな」

感情もなくただ発したただけの言葉はこの静けさの中で大きく響き渡った。

どうしてこの場で待たされている理由を思い出した。

闘わされるために待っているんだ。

あの小うるさい女が押し付けてきた決闘をさせられるために。

もちろん自身の肉体で闘うのではない。

ISと呼ばれるパワードスーツを纏つての闘い。

子供同士の銃や刃物を使った闘い。

そのくだらない決闘に使うISが来るのを待たされているんだ。

「……遅いな」

腕を組んで目を閉じている箒がポツリと呟いた。

確かに遅い。いつまで待たせるものか。

そろそろ帰っても良いだろうと動きだそうとした時、バタバタと騒がしい音が聴こえてきた。その騒音は次第に大きくなっていき、静寂を消し去った。

「織斑くん織斑くん織斑くん！！」

勢い良く現れたのは肩で息をしている山田先生。その後ろから織斑先生が現れた。もう少し遅く来てくれていれば良かったのにな。

「き、来ました！！ 織斑くんのISが！！」

呼吸を整えた山田先生が嬉しそうに言う。子供みたいだ。

山田先生の声に呼応するようにピット搬入口から白い塊が出てきた。この白いISが俺の使う物らしい。

その場を動かないままISを眺める。

日常生活の何処でこんなものを使うのだろうか？ 無駄に幅を取って邪魔になる。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。でなければ負けるぞ」

時間がないか。それはそちらのミスであって此方のミスではない。フォーマットとフイッティングを済ませなければ負ける。別に負けても構わない。あつちもただ弱い者イジメをしたいだけなのだから。それに無理矢理の闘いに戦意なんて生まれない。

とにかく体を動かす。

ISを装着すれば俺の体格に合わせて勝手に修正してくれる。
視界が広がり空間を余すことなく見渡すことが出来るようになる。

——気持ち悪い。

「十夏、気分は悪くないな」

俺の顔を覗き込むようにして確認をしてくる織斑先生。

後ろの方では筭がムツとしたような顔をしていて、心なしか手を力一杯に握り締めている気がする。

そんな筭は暫く行動を起こさなかったが、一回深呼吸をすると織斑先生を押しつけるようにして俺の前を陣取る。

「信じている」

……ただそれだけ。ただそれだけの言葉。

筭は俺を信じてくれるらしい。

俺が勝利を掴み取ることで敗北を叩きつけられることもない。

ただ、信じているだけ。

俺は頷いてからゆっくりとゲートに向かった。

「あら、逃げずに来ましたね」

これが空を飛ぶと言う感覚なのだろうか？

「最後のチャンスをあげますわ」

昔から人は青空を自由に飛び回る鳥を見て空を渴望したのだろうか？

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理――」

だから人は渴きを潤すために翼を造り出した。重くて冷たい翼を。

「――って、聞いていますの!？」

何をそんなに怒っているのだろう。そんなに自身の話が優先される
と思っっているのか。

巨大なライフルの砲口を此方に合わせて怒る様はいつか人を殺して
しまっんじゃないかと想像させてくれる。

このような危険人物にISなど持たせて良いものなのか？ 国は何
処を見ていたのだろう。

いや、どうでも良いか。

「良いですわ。そのような態度でいたことを後悔させてあげますわ
!！」

ISからの警告音が響き、次の瞬間に右肩の装甲を抉った。右腕が
全体に今まで受けたことのない痛みが走った。

撃たれた衝撃は姿勢を大きく崩して、先ほどまで浮いていた場所か
ら離れてそのまま重力の意思に従って墜ちていく。

地面に激突する前に姿勢制御をこなして空中で制止した。

様々な情報が頭の中に表示されていくがそれらに目を向けることは
しない。

空を見上げるとちょうど良く雨が降ってきた。レーザーの雨が的確
に。局地的な人工の雨が。

「もう一度チャンスをおげますわ」

空高くから聴こえてくる声。圧倒的な優位を自覚した者の態度。

「今此処で泣いて謝ると言うのなら許してあげないこともなくつてよ」

確かにチャンスだと思う。慈悲だな。

それにしても、そちらから仕掛けてきたはずだ。何故此方が謝罪しなくてはならないのだろう？

相手の素晴らしい考え方に疑問を浮べているとISからフォーマツトとフィッティングが完了したと報告がきた。そして現れる確認ボタン。何も考えずに押す。

ぼんやりと光り、ぼろぼろに成り果てた装甲を再構成していく。

「ま、まさか……今まで初期設定のままて闘っていたと言うの!？」

再構成された装甲は全体的に少々鋭くなっていた。

どうやら俺専用のISに変化したようだ。

ISの世界でずつと行きたい希望などないと言うのに。

風景や敵の行動を理解して報告してくるISは俺の思いなど知らぬ存ぜずとさらに変化を起こす。

装甲の至る所がスライドして装甲に隠された部分を晒す。剥き出しになった部分から緑色の粒子が勢いよく噴出して装甲や俺の髪の色を同じ色に染め上げる。

装甲と髪の色が緑色に塗装され終わると粒子の噴出が止まった。気が付くとシールドエネルギーが大幅に減っていた。

「色が……変わったからなんだと言っの!!」

空から降って来るレーザー。

寸分の狂いもなく向かってくるそれは、俺に命中すると鏡に反射するように曲がつてあらぬ方向へと飛んでいった。

「な!?!」

驚愕が響く。確実に命中したレーザーが突然曲がつていったことに命中したようだ。がシールドエネルギーの減少はない。

これが俗に言う無敵状態なのだろう。実は強いISなんだな。

レーザーが降り注ぐ中でのんきに景色を楽しむ余裕があるとは、けっこう便利な能力だ。

レーザーの雨は相手のエネルギー切れになるまで続いた。

身勝手で身勝手な身勝手の1

世の中では勝利を手にした者は余韻に浸ると言うが、そんなことは特にないな。

レーザーに晒されただけの一方的な闘いを俺は現在、自室に戻ってお茶を啜っている。同居人である箒も同様にお茶を啜っている。この部屋に特別大きな音は存在しない。二人の茶を啜る音と湯飲みを置く時に小さく鳴る音だけ。

お互いに言葉も交わさずに黙って空間を共有している。

どちらも生活に関しての不満を訴えることなど一度もなかった。

何気なく湯飲みを掴む右手の異物を見やる。

腕に付いている白いブレスレット。

日用としても使えないISは待機状態も使えない物だ。せめて腕時計なら時間を確認出来て役に立つのだが。

別段着飾ることなどに意識したことがないものだから、このような腕にいらぬ違和感をもたらす物の価値も分からない。

――捨てるとしたら分別的に何処に捨てれば良いものか？ ……粗

大ゴミか？

――どうでも良いか。

「箒、もう寝る」

今時の若者にしては早いと思われるが、やることも特にないので寝ることにする。

「そうか。なら、私も眠るか」

湯飲みを片付けてベッドに体を預ける。

箒は部屋の明かりを消してからベッドに向かう。

「十夏。おやすみ」

暗くて良く分らないが、声色から箒は笑顔を浮かべている気がする。どうでもいいことなのだが、そんな気がした。

翌日の教室で山田先生が嬉しそうに宣言した。

「では、一年一組の代表は織斑十夏くんに決定です。一と一を組み合わせると十になるので良いですね」

けっこう無理矢理な論を展開している山田先生に「だから？」としか思わなかった。

そもそも何故俺が代表になったのが気になる。

目立ちたがり屋ならばともかく、普通の人はよほどの向上心がないかぎり代表などやりたくないはずだ。面倒事しかないのだから。

俺は代表になることに興味の欠片もない。対戦者の……オルコットは俺を一方的に攻撃してまで代表の座を欲したんだ。やらせてやれば良い。やる気のある奴がやってくれた方が楽だから。

喜んでいる女子の中で存在が浮いている俺は考えも浮いているのだから。まったくついていけない。

「やる気が起きないので辞退します」

ピタッとクラスの全員が止まる。

やる気もない奴がのうのうとやるなんて真面目にやっている奴の迷

惑にしかないのだ。停止するほどに驚く必要が何処にあると言
うのだろう。

「あああ、貴方ねえ!？」

一番最初に反応したのは小うるさいオルコット。いちいちアピール
をしたいのか大きな音をたてて立ち上がる。
疲れないのだろうか？

「わたくしにあんな負け方をさせて恥をかかせただけでなく辞退！
？ どこまでわたくしを馬鹿にしますの!！」

何をそんなに怒る必要があるのだろうか？ 人に突っかかってまで欲
した代表の役職を無償で渡そうと言っているだけなのに。普通に受
け取ってくればいいものを。

「代表をやりたいんだろ？」

俺の言葉はオルコットの琴線にさらに触れてしまったらしく台本で
も見ているか、すらすらと暴言の数々が飛び出してくる。最初はち
やんとした言葉だったが次第に異世界の言葉に変質していつてので
何を言っているかを判別できなくなった。元々聞いていなかったの
で差し支えは一切ないが。

そろそろ誰かが止めるべきではと山田先生に視線を向けるが、おろ
おろとするだけで役に立つとは思えない。

行動を起こさない山田先生の代わりに織斑先生がオルコットに暴力
を振るって実力行使で騒音を止める。

「織斑。残念だが試合に勝利したお前が代表になるのは決定事項だ」

織斑先生は此方に視線をよこさずに言ってくる。

そのぞんざいな態度に反応を示したのは筈。あからさまに行動を起こすことはしないが敵意を含んだ視線を織斑先生に突き刺す。

「そうだよ、織斑くん。せっかくオルコットさんに勝ったんだから代表になりなよ」

「世界で唯一ISを使える男子なんだから持ち上げなきゃ」

本当に無責任で気楽だ。押し付けられた俺は迷惑以外の何者でもない。

俺の訴えを却下したクラスほぼ全員が盛り上がる。

これは他のクラスの迷惑になる可能性がある。しかし、誰も注意に來ないのを見ると織斑先生のクラスは毎年こんな馬鹿騒ぎをする集まりなのだろう。

「代表候補を負かしたのだから適任だ。異議は認めない。分かったら授業を始めるぞ」

女子生徒達に続くように言ってくる織斑先生。

俺はどうでも良くなったのでただ前を向いて目を閉じる。

身勝手で身勝手な身勝手の2

青空の下で俺は静かに風を感じていた。

強すぎず、かと言って弱すぎる訳ではないちょうど良い風。

昔、風のようになりたいと一度だけ思ったことがある。風みたく自由に世界を流れていたい。誰にも縛られずに生きていたい。

どのような経緯でそのようなことを思ったのかは知らない。ふと思ったのだろう。

「あの一。織斑くん？」

風に乗って言葉が俺の耳に届く。山田先生の声だ。恐る恐ると言った様子。もう少し自身に自信を持つてほしい。先生なのだからほんの少しの威厳が必要だと思う。先立つ者としての厳しさと優しさも。そういえば、中学の時にやたらとベタベタしてくる先生がいた。威厳もなく尊敬の念すら湧き上がるこのない先生が。受け持ちの学生と仲良くしたいのだろう。いちいち会話に参加していた。友達先生とも呼べばいいのだろう。きっと嫌な先生と思われたくないからそのように生徒に接近してくるのだ。

「聞いてますか、織斑くん？」

本来の先生は嫌われる覚悟で生徒を叱りつけるものではないのか。生徒達に社会の厳しさの一端を教えるのが先生の役割の一つで、そのためなら生徒に煙たがられるのは当たり前だろう。

先生についての自論を構築していると目の前に織斑先生がゆっくりと近づいてきた。その手に出席簿を携えて。どうやらその出席簿で俺の頭を叩くらしい。

振り上げて俺の頭に狙いを定めて落とす。

乾いた音が発生して叩かれた時に生じる衝撃が頭を揺らす。

「教師の呼びかけを無視するな」

織斑先生は呆れた表情で此方を見てくる。その呆れに一瞬だけ恐怖を感じた気がしたのだが気のせいだろうか？
それにして呼びかけと言うが一体何の用だ？

「何の用でしょうか？」

確か山田先生がずっと俺の名前を呼んでいた。

山田先生の方に視線を向けると俺が振り向いてくれたことに嬉しく思ったのか、ただただ喜んでいて何の用件かを口にはしてくれなかった。

まさか、ただ呼んだだけではないだろうな？

「山田先生。用件は何でしょうか？」

俺が声をかけると山田先生は驚いた表情になってしまった。

「あつと、えつとー。……あ！！ 織斑くん今は授業中ですから集中してください」

「……気をつけます」

「お願いしますよ」

俺の応えに満足したのか、ニコニコと笑顔を浮べる山田先生。
穏やかなままで終わった会話を無粋な輩が無理矢理続けさせようと

してくる。

「山田先生、織斑くんがISを展開してないことを指摘するんじゃないんですか？」

ニコニコ顔のまま固まる山田先生。

「どうやら本来の目的を忘れてしまったらしい。仕方ない、先生だって人間なのだから。浮かれてしまって目的を頭の隅に投げることであるんだ。」

「織斑、基本的な飛行操縦を専用機持ちに実践してもらったが…
…何故ISを展開しない？」

山田先生の硬直状態を見かねた織斑先生が質問してくる。

今回の授業は外での授業で今は専用機持ちが生徒達のために飛行操縦を実践する時間だ。

俺のクラスには専用機持ちが二人いる。俺とセシリア・オルコット。わざわざ二人がかりで飛ぶ必要はないとISを出さなかったのだが、先生達にとっては俺にもISを展開して飛んでほしいらしい。

この大空を飛べることはとても魅力的であるが、一緒に飛ぶのが小うるさいオルコットだ。辞退したくなる。それに授業妨害になって連帯責任などと言われたくない。

雲一つない青空を見上げる。

此処から遥かに高い所にオルコットが待機している。

指示に従って一人で上昇していった。独りで空に上がっていったんだ。

「一人見せれば十分だと思います」

「それは此方で判断する。いいからISを展開しろ」

仕方がないと諦めて自らのISを展開する。

展開はイメージが重要と言われるが、ISに恋焦がれている訳でもない俺は展開に十秒の時間を有した。

白い装甲に包まれて、地上から僅かに浮かび上がる。

人は地上から足が離れることに不安を覚えるようなのだが、特にどうこうと思うことはなかった。

「遅い。何秒かかっている」

「貴女が近くで急かすせいでイメージが掴めませんでした」

「言い訳をするな。次に武器を出せ」

本当のことだが抗議は切り捨てられてしまった。

集中している人の近くで遅いだの早く展開しろだの焦らせておいて何を言うのだ。

これ以上口にして面倒な展開にしたくないので、言われたことを黙って実行する。

見たこともない武器をイメージするってどのようなにしてやればいいのだろうか？ あの時武器を出さなかったからな。イメージが何一つ出てこない。

そもそも武器が何なのかまったく分からないので初心者用の武器の出し方を使う。

「雑色」
ぐさしき

武器の名前を言っても何も起こらない。周りにいた人間もキョトンとしている。

考えてみればこの方法はイメージを固める助けをしてくれるだけで、
言えは出てくる訳ではないんだよな。

再会は敵との遭遇 1

入学してから数週間が経った今日。俺はクラスの女子から話しかけられた。何でも二組に転校生が来たとのことだ。

どうしてそこまで興味が持てるのか分らない。高々新しい生徒が学園に入ってきたただだろう。しかも自身のクラスではなく二組に別段興味を抱くことのない俺は驚くことも疑問に思うこともなかった。

女子達もいい加減俺のことを理解したので返事がなくても嫌とは思わない。

「何処の国だ？」

俺の隣にいる箒が尋ねる。

いつも俺と箒と一緒にいるせいか、最近セットで扱われることが当たり前になってきている。箒がどうとも感じていないなら別に構わないが。

「中国の代表候補生みたいだよ」

転校生の情報を教えてくれている女子は箒の愛想のない問いかけにも笑顔で答えてくれる。

いい人だ。名前はなんだったかな？ 確か……赤枝さん？
あかえ

赤枝さんと箒と一緒に転校生についてほのぼのと話しているとわざわざ足音を鳴らしながら近づいてくる人物がいた。

「わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

一番場を乱しかねない人物がこのコミュニティーに参加してきた。

セシリア・オルコットは相変わらず腰に手を当てて自身を見せようとする。途中に俺をひと睨みしてくる。

乱入者の登場に箒は一瞬だけうつとおしそつにする。赤枝さんは困ったように笑うだけだ。

何かと俺に突っかかってくるオルコットは少し面倒だと周囲は認識している。俺に関わっていないときは少し偉ぶる以外は特に悪い人じゃないことも知られている。

「別にお前程度を危ぶむ奴などいない」

「……何かおつしゃいました？」

あと、箒とオルコットは会話する度に喧嘩腰になる。

「別に十夏にはそこまで関係のない話だ」

箒が会話を打ち切ろうと結論を出す。

確かに俺にはまったく関係のない話だ。隣の教室に新参者が来ようが何か害がある訳でもない。

「関係ないことはありませんわ！！ 代表候補ともなればクラス代表になるのは必然。必ず闘うことになりますわ。その時に貴方が無様にやられてしまつては困ります」

急に食いついてくるオルコット。

その勢いに驚いた赤枝さん。少し飛び上がってしまう。

「えっと、何で？」

「何で？ 決まっていますわ。不本意ながらも貴方に代表を譲った

のですから、他のクラスに負けることは許しませんわ」

どうやら保身の為に言ったみたいだ。自身を倒した者が他の相手に負けることは疑いに繋がるからだろう。自分も弱いと思われるからと。

此方としては代表などと言う面倒な役職は御免でオルコットに譲ろうとしたのだが、織斑先生に却下されてしまったんだ。弱くても構わないだろう。

「まあでも、一組と四組だけしか専用機持ちがないので、貴方でも勝てますわね」

専用機持ちは一組と四組にしかないのか。案外少ないのだな。Iスコアの数には有限だから仕方ないと言えば仕方ないが。

「その情報古いよ」

ふと、会話に参加してくる者がいた。その参加者の声は小さなコミユニティーでの会話にしては音量が大きく周りからの視線を集めてしまった。

全員の視線は教室の入り口に集中する。

入り口に立っているのは小さな少女で腕を組んでいる。

その少女の視線はこのクラスの人間の中から俺だけに向けられていた。

知っている顔だ。

「二組も専用機持ちが代表になったのよ。そう簡単に勝てると思わないことね」

「鳳鈴音……?」

「なんで疑問系なの!!」

名前に自信がなかったので疑問系にして言ったのだが、彼女は気に入らなかった。

ずかずかと教室に入り込んで俺の机の前まで来る。

「久しぶりね、十夏。相変わらず表情が死んでるわね」

人の頭をぺちぺちと叩きながら挨拶してくる鈴音に態度が悪いと思っただが別に言うことではない。

「久しぶり。で、何か用か？」

「別に。ただ有名人になったアンタに会いに来ただけよ」

「ああ、そう」

「そうよ」

互いに見詰め合う。そこに甘い雰囲気など存在しない。ただの再会でのやり取りでしかないのだから。

個人的には純粹に再会だけを感じていたいんだが、話しかけてくるのなら相手をするだけだ。

「そろそろSHRの時間だ。戻ったらどうだ？」

この再会の雰囲気霧散させたのは箒。それに対して鈴音は箒を一瞥するだけ。まるで興味がないと再び俺に視線を合わせてくる。

「十夏。誰よコイツ」

視線も向けずに指を差して説明を求めてくる。

「幼馴染の篠ノ之箒だ」

「ふーん。それだけなんだ」

ニヤリと笑う鈴音。

「次は私だ十夏。コイツは誰だ？」

次に質問してくるのは箒だ。

せっかく本人が目の前にいるのだから俺を仲介せずに直接質問を投げ合ってほしい。

「凰鈴音。箒が転校した後に来た。中学二年くらいまで一緒だった」

「なるほど。つまりその程度の関係か」

フムフムと頷く箒。次の瞬間に鈴音と睨み合う。

「十夏に会いに来ただけなんだけど、面白いことが分かったから、とりあえず教室に戻るね。じゃあまた」

片手をあげてから早足で教室から出て行く鈴音。廊下から走る音が聴こえた後、織斑先生が入れ替わるように入ってきた。どうやら鈴音は織斑先生に遭遇して逃げ出したらしい。

再会は敵との遭遇2

日本の学校に初めて登校した時、周りは奇異の視線を向けてきた。そんなに外国人が珍しいのかしら。日本人は排他的な人種よね。

小学校の奴にとって外国人がよほど珍しく、私はすぐにイジメの的になった。

私もいちいちむきになってやり返したりしたものだから、イジメが止むことはなかった。

異国の生活と学校でのイジメにほとんど疲れてしまった私は自身よりも弱く群れから孤立している奴をいじめることにした。

織斑十夏。私のクラスで唯一小さな社会からはじきだされている男。むしゃくしゃしていた私は出会いがしらに頬にビンタをした。それも力強く。

肉を打つ独特な音が響いて手には叩いた感触が感じられる。

そこまでの罪悪感はない。

相手を泣かしたらスカツとするんだと思っていたから。

でも、十夏は私の想像する事態へ向かうことを強力してくれなかった。

「何か用？」

……それだけ。

怒鳴り散らすようなことも泣いて謝ることもなく、まったくの無表情で自分に用があるのかと問いかけてくる。ビンタを呼び止めた程度か何かと思っているのか。

何か行動を起こせば誰かが何かしらの反応をしてくれるものと思っていた私はただ「何でもないわよ」としか言えなかった。

数日後、私は十夏のことと気が付いたことがあった。

十夏はクラスの誰からもイジメられていない。代わりに誰からも相手にされていない。

クラスとの関係は最小限の付き合いでしかなかった。先生とも同じ一応、話しかけられたら応えてくれる。十夏がうつとおしくならないう程度の会話なら普通に応えてくれる。

何時しかクラスとの会話が減少していき、十夏と会話する回数が増えてきた。

十夏は悪口を言ってきたり、意地悪をしてこないから張り合うことをせずに素でいられるからかもしれない。

私の家は中華料理の店を営んでいたので週に何回か一緒に食事をするようになった。十夏の家は姉だけであまり家に帰ってこないことも理由の一つであるけど。

十夏に初めて会った両親は淡々としていて不気味な子供ね、と本人を前にして中国語で評価していた。

少し両親が嫌いになった。

たまに十夏の家にお邪魔することもある。

遊びに行っている訳じゃない。だって十夏は家に帰ると、お茶を飲んで過ごしか寝るしか選択肢がないから。さすがに私が家に来る時は眠らないけど。

十夏の部屋に入ったこともあるけど、面白みの欠片もない部屋だった。必要最低限の机とベッドとクローゼットがあるだけ。自身の色を出していない無色透明な部屋。

十夏らしいなと思った。

なんだかんだで十夏と仲の良い関係が続けてきたが、中学の最後の

年に私は両親の都合で母国に帰らなければならなくなった。離婚と言う子供の都合を無視した、まさに両親の都合で。

両親の離婚については諦めていたが、十夏と別れるのは耐え難いものだった。

一人日本に残ってでも十夏と別れたくないと思った。

でも、子供の我が儘が通じる訳もなく国に帰ることになった。

何かが欠けたような感じでの生活。毎日十夏の夢を見る。

自分はこんなにも脆い心を持っていたのだろうか？

外で一人ボーっとする日々。

——赤い女の人に出会った。

「何か思い詰めているね。どうしたの？」

ソイツは全身がとっても赤い。

「君の今日についているよ。私が君の願いを一つだけかなえてあげられるから」

燃えるように赤い髪に真紅と言っても良いほどの瞳。

「私に出来る程の願いに限定されるけどね」

中国人ではないだろう褐色の肌。その色を隠すのは本来ありえない赤い修道服。

「さて、何を願うかな？」

私の沈んだ心とは真逆の明るい微笑みを浮べたソイツはゆっくりと手を差し出してくる。

ソイツの語る内容は宗教の勧誘を思わせる。でも私はソイツの言葉が耳にスーッと入ってきたので勧誘でないと思った。願いをかなえる。それが嘘だと思えない。

「何でもかなえてくれるの!？」

「私の出来る限界までだけどね」

「なら、いつでも良いから私は十夏と再会するきっかけがほしい!」

「とりあえず、ラーメン片手待っていたわよ」

IS学園の食堂で私は十夏と三度再会を果たしていた。オマケみたいなのが数人くっついていてるけど気にすることでもないわね。

「……待たせていたのか？」

「一応ね」

相変わらず表情に変化がない十夏。声音にも感情が乗っていないからどう感じているのかが分かりにくい。

十夏は券売機の前に立つとテキトーなボタンを押して食券を購入し

ていた。

暫く待てば十夏とオマケがやってくるので空いている席に座ることになった。

席に座って食事が開始されると質問したそうな女子達がそわそわしだす。

我関せずと黙って食事をする私と十夏……と篠ノ之。

一人ぎゃあぎゃあ五月蠅いのは金髪の目立つ女子。

「それにしても、まさか貴方みたいな教養のない方が代表候補生と知り合いとは驚きですわ」

何か十夏に恨みでも持っているみたいだ。いちいち人を小馬鹿にする言い回しだ。ねちねちとしていてこの女子が所属している国の評価を貶めているんじゃない？

「まあ、織斑さんの知り合いであるくらいですから、貴女もそこまですで大した人物ではないのでしょうかね、中国代表候補生鳳鈴音さ……聞いていますの!？」

喧嘩ならお昼を食べ終わってからにしてほしいんだけど。せつかくのお昼だからゆっくりと食べたいし。

まあ、お昼が終わったからと言って話を聞くとは限らないんだよな。アンタに興味ないし。むしろ――。

ラーメンを味わいながら目の前にいる十夏の隣でうどんを啜っている篠ノ之へと視線を向ける。

篠ノ之も同じタイミングで視線を向けてくる。

互いに麺を食している最中のことなので麺を口から垂らしたままの睨み合い。端から見たら凄く間抜けな状況ね。

再会は敵との遭遇3

凰鈴音との再会を果たした今日の放課後。誰もが部活やＩＳ訓練に勤しんでいる中で俺と篤は共同の住居にいた。何をするでもなく過ごしていた。

一言も言葉が飛ばない静かな部屋に唯一響く音はお茶を飲む音だけ。別にお茶以外の飲み物を選んでも構わないと篤に言ったことがあったが、構わないの一言で終了した。

沈黙に支配された空間で安らぐ。

ただお茶を飲む時間がある幸せ。

騒音に晒されることのない安心感で徐々に睡魔が思考を停止に追い込んでくる。

段々と眠くなってきたので湯飲みを適当なところに置いてベッドに横になる。夕食まで寝ようと意識を手放そうとする。

しかし、室内に遠慮なく侵入してきた音が睡眠を妨げる。

反応したのは篤。俺を一瞥して、音の発信源であるドアへと向かう。

「……は？」

ドアを開く音に続いて耳に飛び込んできたのは間の抜けた声。知っている人間の声だ。

「何でアンタがこの部屋にいるのよ」

「お前こそ、この部屋に何の用だ」

どうやら鈴音が部屋を訪ねてきたようだ。驚いている様子から篤が部屋に居ることを知らなかったのだろう。部屋を間違えたのか？

「別にこの部屋には用ないわよ」

「ならばお引取り願おう」

「嫌に決まってるじゃない」

「決まっていない」

よく分からないが放っておけば延々に口論を続けるのではないか？

口論を続けることにはどうも思わないが、部屋の敷居を挟んで続けられるとあることないこと妄想する女子達が面倒だ。

仕方なくベッドから離れて、ドアまで箒と鈴音を迎えに行く。そこまで距離がある訳ではないが。

「あたしの用はこの部屋でもアンタでもないから。邪魔だから退きなさいよ」

俺が短い道のりを進んでドアまでたどり着くと鈴音が箒を押し退けて俺の前に立つ。

「面倒なことになりそうだから一先ず入れ」

そう言つて背を向けて再びベッドへ向かう。来客中なので腰を下ろすだけで横になるようなことはしない。そもそも眠れる状態ではないだろう。

「何か言っても良いんじゃない？」

呆れを含んだ様子で部屋に入ってくる鈴音に、その背後から鈴音を

睨みつけている筈。不機嫌な顔をしている。

「で、何か用なのか？」

早速、鈴音がこの部屋を訪れた理由を尋ねる。

鈴音は俺の質問に答えることをせずに室内を見渡している。暫く見渡して満足したのか、俺に視線を合わせる。

「寮暮らしになっても何にもないね。十夏らしい」

鈴音に言われて、自身でも部屋を見渡してみる。

ケータイ、着替え、筆記用具や諸々が入った鞆、湯のみ。確かに趣味を表すような物がない。

所詮は寮暮らし。別に色々持ち込む必要はないだろう。持ち込むのも持ち帰るも大変だと言うのに何を持ってくれば良いと言うのか？それに織斑先生も着替えとケータイの充電器だけを持ってきたと言うのなら、それだけあれば事が足りるのであろう。

「で、お前は何の用があるのだ、凰鈴音？」

後ろから静かに質問を投げかける筈。鋭い目つきをしているが、背を向けている鈴音には見えてはいない。

「ただ、十夏に会いに来ただけ」

そつか、なら目的は達成したな。

俺は湯飲みの中身を捨てに行き、予備の湯飲みを持ってくる。筈の湯飲みを持ってきて同じところに置く。急須を持ってきて新しいお茶をそれぞれに淹れて、筈、鈴音に渡す。

「すまない」

「ありがとう」

礼を言ってきた二人は同時にお茶を口にする。仲が良いな。

お茶の活躍により、落ち着いた時間が帰ってきた。

三人になったが、二人の時と変わらない沈黙が空間を支配し始めた。お茶の成分には空間に沈黙をもたらす作用でもあるのだろうか？

——どうでも良いか。寝よう。

親しき仲にも礼儀ありと言うが、この空間に睡魔が再登場してきたので湯飲みを置いて横になる。

目を閉じて自分と世界を遮断する。

室内に微かに響く寝息に一定のテンポで上下する胸。

明らかに眠っている。他人が居る時は基本眠らないのにも関わらず、それほどにこの風鈴音と呼ばれる女子は十夏と関わりがあるのだろう。

湯飲みに口元に持っていていきながら十夏の寝顔を見る。

……何時見ても可愛い顔をしている。

男を可愛いと評価して良いものかは知らないが、十夏の寝顔を見るとそう思ってしまう。

普段見せる無表情とは違い、母の胸の中で安心したように眠っている。十夏が無表情を解く唯一の時間だ。私の至福の時間でもある。

チラッと隣で十夏の寝顔に見惚れている凰を盗み見る。

キサマが居なければもっと良いのだがな。此処は私と十夏だけの部屋なのだ。部外者がズカズカと入ってきて良い場所ではない。心の中で存在を非難する。

「あのさ……」

凰が十夏の寝顔から渋々と視線を外して私に向ける。
私も凰に視線を合わせる。

「十夏を賭けて勝負しない？」

その顔が凶悪な笑みを浮かべる。
一瞬ゾツとして、次に殺意が沸いてくる。瞬間だけとは言えおののいてしまった自分に。そして、この女から十夏を護るために。

「……受けて立つ」

今の内に芽を摘んでおかねばならない。

再会は敵との遭遇 4

私がくだらない大人の事情で十夏と別れることを余儀なくされた後に現れたと言う女。それが今、私の目の前にいる。

凰鈴音。私と同じく十夏に好意を寄せている輩。

私は十夏のこととは好きだ。会えなくなってから気が付いたことなのだが。だから、自制する力を求めた。今まで正直になれず暴力を振るっていたのを止めるために。十夏を護るために。

だから、私は凰鈴音と違い本気であると、想いが違うと思い知らせる必要がある。

十夏を賭けての決闘の申し込みから数日後、学園内に幾つかあるアリーナで私と凰が向かい合って浮いていた。

この勝負は誰が見ても私に勝ち目がないこと理解するだろう。

国内で生産されたIS、打鉄を纏う私。鎧武者を思わせる装甲に守られ、刀を模したブレードを装備している。もう一つ、ラファール・リヴァイヴを選択することが出来たのだが射撃系の装備が主体のISなので扱える訳がないと早々に見切りをつけた。日本はアメリカとは違って銃社会ではないので射撃はまったくの未経験。対して、刀による近接戦闘は昔から剣道をたしなんでいたもので、まだ腕に自信がある。あくまで生身の剣道には……だが。普通の剣道は飛ばないものであるが、ISは空中で戦うのが基本的なので剣道の足裁きなどほとんど役には立たない。

向かいに浮いている凰の肩書きが私に勝ち目がないことを周囲に知らしめている。

中国代表候補生で専用機持ちの優等生。厳しい競争を勝ち抜いてその座を手にしたのだろう。大きく差が開いているのは目に見える。

「始める前にハンデをあげる」

青竜刀を繋げたような武器を新体操のバトン見たく回転させて鳳はニヤリと凶悪な笑みを浮かべながら提案を投げかけてきた。自身が絶対的な優位にあると分かっているからの提案か、それともクラス對抗戦のために実力を隠しておきたいのか。どちらかは分からない。

「私のIS『甲龍』には第三世代兵器が搭載されているんだけど、それを使うと一方的なイジメになっちゃうのよ。だから、この双天牙月だけで相手をしてあげる」

なるほど、武器の威力を隠すことにあつたのか。微々たるものだが勝率が上がったな。気休めにもならない程度だが。

「開始はそっちに任せるから」

双天牙月と呼ばれる武器を回転させたまま私が動きだすのを待つ鳳。相手は私を数段上回る強者。想いでは勝っていると馬鹿みたいな希望に縋るうとは思わない。だからと言って諦めて負けを認める気もない。

刀を構えて、今までの授業内容を思い出す。

——構わん。正面突破だ!!

小細工など無駄でしかないのだ、正面だけに集中すれば良いと眼前の敵へと刀を構えて突撃をする。

「はあ!!」

凰を射程に捉えると刀を縦に振るう。

耳を劈くような金属音が響き、攻撃を防がれたと瞬時に理解して後退する。

すると先ほどまでいた場所を刃が通り過ぎる。

「へー、少しはやるんだ」

双天牙月を振りかぶった姿勢のままに此方に言葉を投げる凰。隙だらけな体勢を晒しているが私は攻撃をしようとはしない。

「わざとらしいぞ。負けた時の言い訳作りでもしているのか？」

フフツと薄っすらと笑う。

「言ったわね。せっかく優しくしてあげようとしたのに」

「お前の優しさなど要らん」

「あたしもアンタなんかにあげないわよ!!」

攻め手が私から凰に代わり、様々な方向から双天牙月が向かって来た。

私は防御に専念することを余儀なくされてしまい、攻める糸口が見つからない。

凰の猛攻を刀で受け流していく。剣道の経験が私を生かしているが、候補生相手に何処までやり過ごせるものか？

……何にせよ、肉を切らせて骨を絶つまでだ!!

どうしてあの時、あたしは再会するきっかけを求めたのか？ ただ願いをかなえてもらっただけで十夏の近くに存在するなんて、あたしの望むところじゃない。自身の実力でアイツのところまで行けななきゃいけない。あたしは護られたいがために十夏に近づく訳じゃないんだ。

肩で息をしている篠ノ之を眺める。捌ききれない攻撃に徐々に追い詰められ、もう、シールドエネルギーはないに等しいはず。あたしの方は軽傷ですんでいる。猛攻の中で篠ノ之がダメージ覚悟で放った攻撃を防げずに受けたもの。

せめてダメージを与えろと言った心構えなんだと思う。日本の侍みたいな雰囲気を持つているのだ潔く散れば良いのに、皮一枚繋がったまま立ち向かってくる。

「そろそろしつこいんだけど、いい加減にしてよね。無駄な時間になっただけだから」

今、腕時計をしている訳じゃないが、手首を見る動作をして時間が無いことをアピールする。

篠ノ之は私の訴えを見ることがなく肩で息をしたまま動く気配を見せていない。もしかして、もう戦意がないのかな？ だとしたら、あたしの勝ちは確定しているんだけどね。十夏の隣も確定よ。

「じゃ、あたしの勝ちで良いよね。……はい、じゃあ終了ね。お疲れ様」

立っているだけの篠ノ之に背を向けてゆっくりとピットに向かう。今から荷物をまとめて十夏の部屋に引っ越さなきゃ。篠ノ之さんに

はあたしの部屋をプレゼント。

……え！？

背筋に何かおぞましいモノが這っていくような感覚がして、自分の動きがやけに鈍重になる錯覚が脳を支配する。背後に何か化け物が潜んでいたんだっけ？

恐怖に支配された人間が振り向くのと同じ速度で振り返ると視界一杯に篠ノ之箒がいた。その顔はあたしが見てきたどんな人間の顔よりも恐怖を連想させてくれるものだ。振り上げた刀がゆっくりとあたしの頭へと下ろされていく。ゆっくりゆっくりゆーっくりと――。

――頭を切り裂く。

スパーンっと。

そんな錯覚。

「かはっ！？」

無意識に解き放ってしまったのか、衝撃砲『龍咆』の见えない弾丸が篠ノ之を吹き飛ばしていた。数メートル飛んだ篠ノ之は地面に叩きつけられて試合が終了した。

……負けた。勝ったのに負けた。

自らを縛って善戦していたのに最後の最後で縛りから抜け出してしまった。ルールを作っておいて破った完全な敗北。

立ち上がり、ゆっくりとピットに向かう篠ノ之を見る。

あたしはアイツを見誤った。十夏のことでも勝てると過信していた

あたしのミスだ。あたしとアイツの間にあるモノはISの実力じゃない。十夏に対して何処まで真剣なのかだ。……自分でも何を言っているのか分からないけど。

「箒!!」

対等な位置にいる箒に私は言わなきゃいけない。

「今日の試合は無効!! いや、引き分けだからね!!」

箒の反応を確認せずにあたしは箒とは逆の方向にあるピットに向かう。

ISの力なんかじゃなくて自分の実力だけで十夏をモノにしてみせるんだから!!

寝て起きて変化して1

この学園の一番初めにあるイベント『クラス対抗戦』まで一週間を切った。それぞれのクラス代表が訓練に勤しんでいる最中、俺は相変わらず自室で茶を飲んで過ごしていた。

所詮は寮と言うべき余裕のない空間で俺、箒、鈴音の三人は各々楽な姿勢で和んでいた。

「此処だけ平和よね」

穏やかな声色が空中に溶けて消えていく。

俺も箒も声に出して同意することはない。無言の肯定を示すだけだ。鈴音も俺達が応答しないことを知っているから何も言わない。

俺は湯飲みを傾けて喉を潤そうとする。しかし、傾けて唇に当たるのは水滴。中身は既に飲み干した後だったらしい。意識して湯飲みを持っていた訳ではないから気が付かなかった。

「箒。お代わりを頼む」

「あ、あたしも良い」

俺と鈴音の手が箒へと突き出される。

「分かった」

突き出された湯飲みを受け取った箒は急須から新たな茶を注ぐ。その間も会話がなく、茶を淹れる音だけが存在を主張していた。淹れられたばかりの温かい茶の入った湯飲みを受け取ると、少しだ

け頭を下げて感謝を表す。

「ありがとう」

「どういたしまして」

鈴音の礼に対して箒も言葉を返す。

何時頃だったろうか？ 箒と鈴音の関係から明確な敵意が取り除かれたのは。寝て起きて夕食に行こうとしたら、少しギクシャクしていたけど言葉を交わしあっていた。寝る前まで感じていた刺々しい物言いは何処かに捨てたようだ。

……どうでも良いか。

良い意味での沈黙を堪能していると、部屋の外から足音が聞こえてきた。段々と近づいてくる足音は最も大きく踏み鳴らされた後、ピタリと止んだ。たぶん、この部屋の前で歩を止めたのだろう。

コンコンツと案の定此処に用があるのか、ドアをノックし始めた。来客の訪問に箒と鈴音は顔を見合わせてから同時に此方を向いた。その顔はどうする？ と聞いてきた。その間に体を稼動させた箇所は首から上だけで、音を立てることをしていない。相手は俺達がいるのかいないのか分からない状態なので、俺は居留守を使うことにした。

断続的に聞こえるドアを叩く音は先ほどまでこの空間に漂っていた沈黙を消し飛ばしていた。

いい加減に諦めてほしい。何度も叩いて迷惑しているのだから。

「織斑さん。居ますの？ 居ませんの？」

ドア越しに聞こえてきた声はオルコットの声に間違いはないだろう。俺を嫌っている彼女が一体何の用なのか？ いささか気になるところだ。

「ああ、もう。どうせ居るに決まっていますので言わせてもらいますわ。貴方はクラス代表なのですから訓練に打ち込んだらどうなんです？ わたくしを負けさせておいて、他のクラスに無様に負けてもらっては困りますわ。聞いていますの？」

ドアの外で一人で喋るオルコット。周りに視線がないか確認はしたのだろうか？

「え……。なんか外に危ない奴がいる」

「気にするな。私達に害はない」

延々とドアに向かって語りかけていたオルコットが遠ざかると鈴音がかわいそうなモノを見る目でドアを見つめる。ドアを挟んで向こう側にいた人物を見ていたのかも知れないがどちらでも良い。

「そついえばさあ」

ドアに向けていた視線を俺に移した鈴音。

「クラス対抗戦の始めって一組と二組の試合だったよね」

「そつだったか？」

「そつよ。勝算があるか聞きたいんだけど」

「……特にないな」

「あー、そう」

「……ああ」

暫くの沈黙。その間、箒が茶を飲む音しか聞こえない。

勝算があるのか？ 考えたことがないな。オルコットとの戦いは流された結果のモノであつたから勝負の意識はまったくなかった。だが、今は何の因果がクラス代表になっている。

「少しは練習した方が良いのか？」

「まあ。しないよりは良いかもね」

鈴音の言葉に考え込む。

この前みたいな訳の分からない力が発動するとは限らない。毎日二十分くらい体を動かすか。健康にも少しは良いだろうし。

騒動を退けて2（前書き）

何か変な感じになってしまいましたが気になさらずどうぞご覧ください。

騒動を退けて2

クラス対抗戦当日。アリーナの中で俺と鈴音は向かい合った状態で浮いていた。

転校生と唯一の男性が闘うからだろうか、アリーナの観客席は空いている場所が存在しない。席を確保できなかった者はおそらく画面越しに試合を観戦することになっているだろう。

白いISを展開した俺は静かに開戦の時を待っていた。初めから勝てると思っていないが。

鈴音のIS『甲龍』を見ると明らかに攻撃的なフォルムをしている。それに比べて俺のIS『白色』^{びやくしほ}はスラッとしている。無駄な装飾を省いた結果だと思う。初期装備は『雑種』と名付けられた西洋の剣で刃渡りは1メートル位。剣のことについての知識はないが、これはバスタードソードと分類されるだろう。

「あたしの勝ちが決まっているけど少しは頑張rinaさいよ」

試合開始を待っている間に難しい注文をつけてくる鈴音。

いかに自分が頑張っても、頑張っているかどうかは見る人の物差しで決まると言うのに大変なことを課してくるな。

『それでは両者。試合を開始してください』

アナウンスの次にブザーが鳴り響く。試合が始まってしまった。

俺が最初にとる行動は『雑食』を構えながら全速力での突撃。素人丸出しの戦い方である。まあ、実際に素人であるからそこまで恥じることはない。

俺よりも経験豊富な鈴音は俺の馬鹿みにまっすぐ振り下ろした

刃を『双天牙月』で苦もなく受け止める。

俺が攻撃することを許されたのは最初の一撃だけで、後は鈴音の独壇場になるはずだった。

突如としてアリーナ全体に衝撃が起こり、何かが侵入してきた。

「乱入者というじょー!!」

「ミッションスタート」

侵入者はISを展開した知らない女性。しかも二人で熱いのと冷めたのだ。顔はバイザーに隠れて見ることが出来ない。

ISの形状は二人とも打鉄を改造したようなものだ。熱い方の武器は巨大な刀で、冷めた方は両手に適度な長さの刀を持っていた。

俺達が攻撃するべきかどうかと逡巡していると相手の方が先に行動を起こしてきた。熱い方が俺に、冷めた方が鈴音に向かってきた。

「どっせーい!!」

おおよそ女性の言葉とは思えない雄たけびと共に巨大な刀で切りかかる熱い奴。

攻撃を防ごうと剣をぶつけるが、質量の問題か受ける度に後退を余儀なくされる。

「どうしたどうしたどうしたー!! 反撃してこいよおお!!」

「なら、反撃してもらえように手加減をしろ」

「なに無表情でカッコ悪いこと言ってんだよ!!」

攻撃の嵐がさらに威力を増してくる。

俺も途中から受け止めるのを諦めて回避と後退に専念する。

逃げる俺と追いかけてくる熱い奴。広いアリーナの中をジグザグと動き回る。周りを気にしないで逃げ回るせいか、何度も鈴音と冷めた奴の戦いに水を差している。

『織斑くん、鳳さん。今すぐアリーナから脱出してください。すぐに先生達がI Sで制圧にいきます!!』

逃げ続ける状態からクルリと反転して、熱い奴に突っ込む。

「やっと真面目に戦う気になったか!!」

その場で止まり巨大な刀を構えて迎え撃つ熱い奴に俺は『雑種』を投げ捨てて突撃をする。

「……あれ!？」

武器を捨てると言う予想外の行動に動きを止めてしまう敵。おかげで懐に入り込むのは簡単だった。

俺が次に行うことは相手の武器を奪うことでもそのまま通りすぎることもない。全身を使った単純な攻撃『体当たり』をするだけ。高速での衝突は大きな衝撃とシールドエネルギーの消費をもたらした。

体当たりの勢いで重なり合う形のまま墜落する。

「いいねえ!! 肉弾戦の方が燃えるって奴かい!!」

重なり合う形から体勢を立て直した熱い奴は俺の背中にスラスタの出力を乗せた蹴りを放つ。

抵抗も出来ずにぶっ飛ばされた俺は冷めた奴と戦闘していた鈴音に

激突して、さらに巻き込んで一緒にぶっ飛んでいく。

止まったのはアリーナの壁にぶつかる一歩手前。俺が下で鈴音が上になっている状態だ。

「ちょっと！！　なんでこっちに飛んでくんのよ！？」

「運命じゃないか？」

「運命って……だとしたらあたし達の相性良いんじゃない！？」

「……かもしれないな。ところで、何時までこの状態にいる気だ」

「もう少しだけ待ちなさいよ」

鈴音が退かないので俺はもう暫く此处で寝ころがっていないければならぬらしい。

ISから敵が接近してくると警告が響いているので鈴音が渋々と俺の体から退いてくれる。

立ち上がり接近してくる敵二人を眺める。

「はい。これ使いなさいよ」

ただ向かってくるのを待っていると隣にいる鈴音が双天牙月を真ん中から分裂させて片方を渡してくる。

先ほどのバスタードソードとは違うが武器には違いないと構えると白色の装甲がスライドしていき、装甲隠された部分をさらけ出す。

装甲がスライドすることによって露出した部分から青色の粒子粒子が噴出してくる。それは俺と鈴音を包み込んで、装甲と髪の色を青に変化させる。

「な、何よこれ？」

「知らない」

オルコットの時とは違う色に染まったが、今度はどんな効果を表すのだろうか？

「あーもう！！　どうでも良いや。とにかく今はアイツ等を倒す」

鈴音はそう言つて龍砲を放とうとするが、敵二人はイグニッション・ブーストで接近していて刀を振り下ろそうとしている。

回避も攻撃も間に合わないが鈴音は苦し紛れに攻撃をする。

「ぐえ！！」

「な！？」

どういう訳か間に合わないはずの龍砲は瞬時展開して敵二人を吹き飛ばした。

理由は定かでないが姿勢を崩した相手に好機と思い追撃と思つて行動した瞬間に相手を攻撃できる距離まで詰めていた。

スピードの上昇を疑問に思いながら青龍刀を振るう。

熱い奴が防ごうと巨大な刀を構える前に攻撃が当たり、またもや体勢を崩したのでさらに攻撃を浴びせる。

見えない攻撃とはこのことを言うのだろう。攻守が逆転している。熱い奴を助けようと冷めた奴が俺を後ろから狙うが瞬時に割つて入った鈴音の見えないほど速い攻撃にシールドエネルギーを削られていく。

「十夏。離れて」

鈴音の指示に攻撃を止めてその場を離れると鈴音の龍砲が轟き、二人を吹き飛ばした。

吹き飛ばされた二人はその衝撃を利用してそのまま上昇してアリーナから離脱していった。

「次は負けないからな。覚えてやがれ!!」

「失敗です」

最後まで温度差のある敵だった。

小さな世界が砕けて散って3

自然から生まれた者が人と名乗ることが出来るのなら、人工的に生み出された私は一体何と名乗れば良いのだろうか？

名前がない訳ではない。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』が私に与えられた名前だ。識別するために与えられた名前。

兵器として生み出された私は様々な知識を吸収して、訓練で体に染み込ませた。何をどうすれば良いのかと。瞬時に脳から答えを弾き出し、敵対勢力を無力化する。

全てを覚えその知識や技術を発揮出来る私は誰よりも優秀であった。

ISと呼ばれる世界最強の兵器が台頭するまでは。

ISの出現により、私は適合向上の処置として『ヴォーダン・オージエ』と言う瞳を手に入れた。全体的な反応速度を向上させるはずであったその瞳は私を奈落へと墜落させた。

IS訓練で遅れを取り、部隊員からは嘲笑を成果が出せないことに出来損ないの烙印を押されてしまった。

ISによって私の全てが否定された気分になった。

何時しか私は訓練に参加せず人気のないところでISを恨むようになっていった。

「沈んでいるいるね。何か悩み事でもあるのかな？」

ISのせいでの今までの有用性を失った物が眠る薄暗い倉庫の中で私は炎に出会った。

鮮血に染まっていると勘違いするほどの髪に赤い瞳。常識では考えられない赤い修道服。その修道服から見える肌は褐色でこの国の人間でない事がすぐに分かる。

「君に一つだけチャンスをおげましょう。願いを現実にするチャンス。何を求めるかは自由。私のかなえられる範囲でなら如何なる願いもかなえてあげましょう」

出来損ないの烙印を押された私の心を代弁するかのような薄暗い空間を真つ赤に燃える炎は明るい声色で照らしてくる。どうしてか分からないがその声に気休めなどは感じられない。本当に私の願いをかなえてくれるような気にしてくれる。

「本当になえてくれると言つのなら――」

――私の願いを聞き入れろ。

お母さんが亡くなってから暫くして、父の部下と名乗る人達が訪れてきた。

一体何の用だろうと考えるけど理由が思い浮かばない。逆らうことは出来ないと理解していたから、何も聞かず抵抗もせずデュノア社へと連れて行かれた。

ISの適正検査が行われて、IS適応が高いと分かると非公式のテストパイロットを務めなくてはいけなくなった。

初めて父と会った時にお前の元居た場所はもうないと言われた。此処でテストパイロットに従事しろと。

私はISに興味がなかったのでテストパイロットは苦痛でしかなかった。

無駄な物を省いた最低限の生活。

弱い暗示で自身に言い聞かせての生活。

誰からも嫌われない為に嘘を貼り付けての生活。

愛人の子供でしかない私は本妻の人に殴られた。その時は謝る気が微塵もないのにひたすら謝った。謝る気がないとばれてしまうような穴だらけの嘘を心に纏って。

今まで嘘をついたことがなかったので人を騙していることが辛かった。

デュノア社は他の企業に比べて第三世代ISの開発が遅れている。ノウハウも時間も圧倒的に足りてない状態。もし次期主力ISのトリアルに残ることが出来なければデュノア社は吸収されて消滅する。

危機的状況に陥った社長は私を世界で二番目にISを扱える男として偽り広告塔に祭り上げようとした。

この打開策で一番被害を受けたのは私。自分を『ボク』と呼び、言葉使いや仕草、あらゆる女性的要素を男性のものに塗り替えられる。少しでも女の子らしいところを見せると叩かれる。

嘘をついていくことと体を襲う痛みに耐えるしかない私はある日、真っ赤な太陽に照らされた。

「とても辛そうだね。何か嫌なことがあるのかな？」

雄々しく燃え上がるような赤い髪に真っ赤な瞳を光らせている。この国にはそぐわない褐色の肌は見たこともない赤い修道服に包まれている。

全身が赤い女の人は膝を抱えて座り込んでいる私の前でしゃがんで視線を合わせてくる。

嫌味の一つない純粹な笑みを浮べている。

「もしも辛いことがあるのなら、たった一つだけ君の願いをかなえ

てあげましょう。君の望んでいる大きな願いを言ってごらん。そして、私の可能な限りかなえてあげる」

抵抗もなくスーツと耳に入ってくる暖かい言葉は私の心に光を差し込んでくれる。この人はきっと私の願いをかなえてくれると。嘘をつかないと。

「わ、私は——」

——貴女を信じて願いを告げます。

クラス対抗戦は突然の襲撃が原因で中止を余儀なくされた。

襲撃者は十夏と凰の活躍によって撤退していったが、今回の騒動はIS学園の外部からの攻撃に対策を講じていなかったことを晒してしまう形になってしまった。

今回の襲撃は明確な目的が分からない。おそらく、世界で唯一ISを起動出来る十夏を狙ったものと私は睨んでいる。

ISの世界大会『モンド・グロツソ』二連覇した私の弟だから易々と手を出せないと過信していたのが原因だろう。私は襲撃に対して何も行動を起こすことが出来なかった。

十夏のISが単一仕様能力を発揮してくれたから事なきを得た。

それにしても白色の単一仕様能力は一体何なのだ？ 緑になってレーザーを弾いたり、青になって全体的にスピードが上昇したりと。それに近くにいる仲間にもその効果が適応されるとは。

……そもそも白色は何処の企業が造ったのだ？

「今回の騒動もだが、束に聞いてみるしかないな」

「部屋の調整が済んだので篠ノ之さんはお引越しです」

……十夏と私の部屋にやってきた山田先生が最悪な宣言を笑顔で突きつけてくる。たとえ本人に悪気がなくても私には悪意の塊にしか感じられない。

何故今更になって部屋の調整が済んだのか？ 在学中はずっとこの部屋割りで行くのではなかったのではないか？

十夏の反応が気になってチラリと見ると相変わらずの無表情であった。しかし、私には疲れているように見えた。今回の騒動と今現在起こっている引越し宣言に。

「分かりました。引越します」

此処でごねて十夏に迷惑をかける訳にはいかない。

「その代わりに――」

今回起こった襲撃事件はあたしにとって嬉しいものだった。十夏と

一緒に戦えたし、IS越しただけで長い時間触れ合うことができた。箒よりも一歩リードね。

中途半端な時期での転校なので同室の人間がいない。だから騒がしくしても問題がないんだ。一人部屋最高ね。

一人ベッドでゴロゴロしているとコンコンつと扉を叩く音が聞こえてくる。来客のようだ。

もしかして、十夏!?

急いで扉を開けると、そこには不機嫌な表情をした箒が立っていた。けっこうな荷物と共に。

「今から同室になる、篠ノ之箒だ。よろしく頼む、凰鈴音」

ライバルの登場であたしの自由空間は消滅したのだ。

真逆な転校生1

朝からテンションを上げて過ごせる女子生徒達についていけない。正確にはついていく気がない。

そもそも何が原因で女子生徒達がテンションを上げているかと言うと、転校生が一組に編入してきたからだ。しかも二人。きっと振り分けが面倒になってまとめて此処に入れたのだろう。

真ん中最前列に座らされている俺は転校生達をジーツと眺めていた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことが多いかと思われますが、よろしくお願いします」

デュノアはにこやかな顔で自己紹介をすると礼儀正しく一礼をした。

「お、男!？」

誰かが驚きの声を上げる。

そこまで驚くことであろうか？ 男など何処にでもいる。

「はい。此方にボクと同じ境遇の方いると聞いて本国より転入を――」

貴公子とは目の前の人物を指すのだなと思える立ち振る舞い。嫌味のない笑顔が騒音の嵐をもたらす。

「キャー!!」

「二人目の男子!!」

「しかも護つてあげたくなるタイプ!!」

クラス中が湧き上がる中、俺は筭の反応が少し気になったので窓側の席を一瞥する。

筭は現状に興味がないようで窓の外を眺めていた。日の光が心地よさそうである。

それにしても同じ境遇だから来たのは間違いだ。俺とお前とは生まれや育ちの境遇が違うのだから。

歓声の嵐にどう反応していいのかわからないデュノアは苦笑いするしかないようだ。

ところで、目の前の男は何きっかけでISを動かせると分かったのだろうか？

「皆さんお静かに。自己紹介はまだ終わっていませんから」

慌てて人工の嵐を止めに入る山田先生。

不介入を貫く織斑先生。貴女は此処の担任だと記憶しているのだが。

不憫なものだな歓声の後に自己紹介をするのは。

デュノアの隣で視界を閉ざして静かに存在するもう一人の転校生に視線を向ける。

銀髪、眼帯……。目立ちたがり屋なのだろうか？　ともかくこのクラスの雰囲気溶け込む気のない意思が現れている。

腕組みをしたままだんまりを決め込んでいる銀色は挨拶する気もないようだ。

「挨拶しろ、ボーデヴィツヒ」

ようやく担任の仕事を始めた織斑先生の催促。

しかし、ボーデヴィツヒと呼ばれた銀色はそれを聞き入れることを

せず、まったく動くことをしない。

明らか冷めた雰囲気のボーデヴィツヒはクラスからの視線を浴びていた。興味の視線ではない。侮蔑の視線だ。

女子はグループを作ると言う。ボーデヴィツヒはどのグループにも参加することは出来ないだろう。

無言でい続けるボーデヴィツヒに織斑先生は痺れを切らして、出席簿を構える。狙いは頭。

世界最強の称号を持つ教師の攻撃。それをボーデヴィツヒは手首を掴むことで難なく受け止める。

「次は此方も対応の対処をさせてもらう、ブリュンヒルデ」

無表情を織斑先生に向けるボーデヴィツヒ。目は自身が圧倒的な優位にいと語っている。

振り下ろす最中で止めた腕を無理矢理自身の頭の上から退けて離す。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

簡潔な自己紹介をしたボーデヴィツヒは教師の指示を待つことなく、後ろの席へと歩を進める。

織斑先生はそんな身勝手な生徒を一瞥するとデュノアに空いている席に座るように指示をだす。

先ほど掴まれた手にはボーデヴィツヒの手形が残っていた。

事態を飲み込めていない女子達は織斑先生とボーデヴィツヒに交互に視線を移すしかなかったようだ。

「おい、織斑。デュノアの面倒を見てやれ」

HRをが終了しようと言う時に織斑先生は俺に面倒事を押し付けてきた。

その一言で終了すると織斑先生と山田先生はさっさと出て行った。最初の授業からグラウンドに出なくてはいけないので席を立ちまっすぐ教室を出てアリーナ更衣室に向かう。デュノアについては一切の関与をしない。一緒に行動すると群がってくるのがいるから。

「あれ！！ 織斑君は！？」

遠くから声が聞こえるが関係ないだろう。同じ境遇と自身で言っていたのだから一人で頑張ってくれ。俺はそう言う境遇だったからな。適切なことを思いながらデュノアを見捨てた。

真逆な転校生2

一組と二組の合同授業が始まった。

この授業から格闘と射撃の実戦訓練が行われるようで、一部を除く女子生徒達が妙に気合がはいっている。例外は明後日の方向を向いている筈に気だるげな顔で足元を見つめている鈴音、周り全てを無視するかのように目を閉じて腕を組んでいるボーデヴィツヒ、周囲の熱意を柔らかい笑顔で眺めるデュノア。俺もこれ等の例外に該当する一人だ。実戦経験のある専用機持ち達は既に通過した過程だからだろう。

チラリと隣に何故かいるオルコットを盗み見る。

自信に満ちた顔をしている。

目立つことに情熱を注いでいるコイツのことだ。おそらく自身の腕前を披露しようと考えているのだろう。

本当に自信があるなら、どうしてクラス代表に立候補しなかったのか？

「さて、今日は実戦を実演してもらおう」

織斑先生の声が辺りのざわめきを静めた。

実演とは面倒なことを提案してくれるものだ。こんなものオルコット辺りにでもやらせておけば良い。

選ばれたら諦めれるが出来れば選ばれたくはない。実戦などクラス代表絡みだけで十分だから。

「そうだな。――織斑とオルコット。前に出て来い」

選ばれたようだ。悪い意味での身内贗品か？ それとも名前の最初

が『お』だからか？

前者も後者も納得する気にもならない。だが、反論するだけ無駄な話だ。時間の無駄だしな。

「わ、わたくしは兎も角どうして織斑さんが一緒なのですか!？」

此方を指差しながら甲高い声で抗議するオルコット。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ」

返す言葉はオルコットの抗議に答えたものではなかった。相手にする気もないのだろう。

別に反論する気はないが、専用機持ちなら誰でも良いのだろうか？
だったら俺以外の専用機持ちを抜擢すれば良いと思う。

「良いから前に出ろ」

促されて渋々前に出るオルコット。

そこまで嫌な訳ではない俺は何時もの足取りで晒し者になる。
注目を集める中で俺は何もせずにじっとしていた。

隣にいるオルコットは前に出たことで気持ちを切り替えたようだ。
ふふんと腰に手を当てて勝ち誇った笑みを浮べている。

「で、相手はどちらに。わたくしとしては織斑さんでも構いません
が。前に受けた屈辱を晴らす機会にもなりますし」

「対戦相手は私ですよ」

オルコットの大きな独り言が終わったタイミングでISを展開した
山田先生が飛んできた。

量産型のIS『ラファール・リヴァイヴ』を装備した山田先生とそれを見て勝って勝ちを確信しているオルコットを見ると勝ち目がな
いと脳内で瞬時に結論づけた。

考えてみれば、入試試験の時に相手を務めたのは山田先生だったな。
圧倒的な実力差で敗北させられた。負けても良いと言われたのもあるが、根本的な敗因は実力。

経験からくる敗北の予感を実現した。

戦闘が始まって、いち早く攻撃したのはオルコット。早撃ちでレーザーを放つがヒラリヒラリと回避される。数発のレーザーのお返しに山田先生が弾丸をもの凄い勢いでばら撒く。

一瞬で切り替わる攻守を戦いから少し離れたところで観戦している俺。一応『雑種』を持つてはいるが構えてはいない。

試合が始まる前にオルコットが「貴方の出番はなくてよ」と言っていたので言葉に甘えさせてもらっている。

数十秒後にオルコットが負け、戦火は此方まで広がってきた。

山田先生が俺を狙って弾丸を放つ。

弾丸を見切れるほどの異常な胴体視力など微塵もない俺が弾丸など避けれるはずもなく、ボロボロにされて試合終了。

地上に降りると腕を組んだ織斑先生がいた。

「真面目にやれ、織斑」

……そんなことを言うと思った、織斑先生なら。

「貴方が足を引っ張らなければ負けませんでしたわ」

……そんなことを言うとは思わなかった、オルコット。
最初に俺をいらない宣言した奴の言い訳とは思えない。
騒ぎ立てるオルコットに付き合うことはまったくないの、そそく
さと自分が先ほどまでいた場所まで戻ろうとする。

「専用機持ちだからどれ程のモノのと思ったが、所詮は素人と言っ
たところか」

オルコットの一人漫才をクスクスと笑っていた大多数の人間がピタ
リと止まった。誰もが音の発信源に視線を向けると、そこには銀色
がいた。
ボーデヴィツヒは軍人らしいきびきびとした歩きで前にでる。

「何かおっしゃいました？」

「所詮、雑魚でしかないと言った」

さつきと言っていることが違うと思うのだが。

「決闘ですわ!!」

ボーデヴィツヒを指差して宣言するオルコット。その顔は怒りに染
まっている。

対するボーデヴィツヒは臆することなくISを展開する。

「キサマ程度の實力では私に勝つことはできない」

まっすぐと視線を向けるボーデヴィツヒにオルコットは無意識の内
に一步後退していた。

空気も今までの和気藹々としたものがなくなり、全てをボーデヴィッヒの放つものに取って代わられていた。

自身の理性を保つためにオルコットは一度深呼吸をする。

ゆっくりと空気を吸って吐き出す。そして意を決したのか此方に向いてくる。

「貴方も馬鹿にされたのですから、一緒に格の違いを見せてあげましょう!!」

旅は道連れとはよく言う。勝手に喧嘩を売っておいて急に巻き込むな。

仕方ないともう一度前にでる。

真逆な転校生3（前書き）

失敗した感がとんでもない仕上がりとなってしまうました。とりあえずどうぞ。

真逆な転校生3

今行われている授業はもう終わった。二人の反抗期のせいで。

どうしてラウラ・ボーデヴィツヒとセシリア・オルコットが戦うことになったのだろうか？ 教師なら迅速に中止させるべきだ。

空中に浮かび上がるオルコットはボーデヴィツヒを睨みつけている。自身の実力を否定されたことがよほど頭にきたのだろう。何時もの気取ったポーズを見せることはなく、巨大なレーザーライフル『スターライトmk?』の銃口を眼前の敵に向けている。

「今なら、謝れば許してあげないこともなくてよ」

口調とは裏腹に表情は謝ったところで許す気はないと語っている。俺は何時飛び火しても良いようにバスタードソード『雑種』を構える。

「キサマの負けは確定している。何故、私が謝る必要がある?」

黒いISを展開したボーデヴィツヒは迫り来る怒りを気にせずにいる。それどころか微かに笑っている。

自分以外の専用機持ちを下に見ている笑み。

「く!!! 強がり——」

オルコットが言葉を言い切る前にボーデヴィツヒが動きだす。

左肩のレールカノンが轟音を響かせる。

俺なら当たり前のように命中する物をオルコットは余裕に回避して、レーザーライフルで反撃を行う。

一発、二発、三発と撃ちだされるそれをボーデヴィツヒは接近しながら抜けていく。

紙一重の回避にオルコットは動揺してしまう。接近しながらの回避と言う難易度の高い動きをするとは思わなかったようだ。

懐までの侵入を許すまいとオルコットは急速後退しながら狙撃を続ける。

このままの進路でオルコットが後退すると俺のところまで戦線が拡大してしまう。仕方ないので雑種を構えて前進する。

俺の突撃に気づいたボーデヴィツヒは両手首の装甲からプラズマ刃を展開して対峙してくる。

十分な距離まで接近したことに雑種を振り上げて攻撃しようとするが、ボーデヴィツヒの攻撃スピードの方が上だ。プラズマ刃で切り裂かれて吹き飛ばされる。

距離を離される前に体勢を立て直す。その行動に移ろうとして、足を凄いい勢いで引っ張られる。

足にワイヤーが絡みついでいて、それが俺を振り回していることに気が付いた時にはオルコットに激突する寸前だった。

「キヤー!?!」

何時かの再現みたいに二人こんがらがったままで地面へと落ちていく。

地面までの道中、レールカノンの轟音が響き、たまたま弾丸の軌道にいたオルコットに命中する。

地面へ到達する寸前に落下が止まり、また足を引っ張られる感覚に襲われる。

「今はキサマに用はない」

ボーデヴィツヒの声が耳に入ってきた瞬間に横に引つ張られてオルコットから離されるように投げ飛ばされた。

俺が投げ飛ばされた後、オルコットは圧倒的な力の前に敗北した。ワイヤーブレードから開放されたことでチャンスと思ったのか、ブルーティアーズを展開してボーデヴィツヒに向かわせる。

「完成度の低い兵器で私に傷を負わせられると思うな」

ボーデヴィツヒのISから飛び出したワイヤーブレードが次々にブルーティアーズを串刺しにして、さらにはレーザーライフルを破壊する。

後は一方的な蹂躪だけ。

思う存分オルコットを痛めつけている間、俺のISは緑色の粒子を噴出させて俺とISの色を緑色に塗り替える。

確かこの色は攻撃無効化だった気がするなと思っていてオルコットに飽きたボーデヴィツヒが向かってきた。

レルカノンを放ってくるが、白色の緑色装甲に高速で迫る弾丸は命中する前に曲がる。

「ふん。それがどうしたと言うのだ」

今ので諦めてくれると助かるのだが。

射撃が効かないと理解したボーデヴィツヒは一瞬で間合いを詰め、両手のプラズマ刃を俺に叩きつけてくる。

接近戦なら有効。その考えは当たったらしい。ガリガリとシールドエネルギーを削られていく。

白色の色が変わることを『模様替え』と勝手に言っているが、その模様替えてエネルギーを消費したせいですぐに底を尽きた。

授業を無視した試合が終わったとISを待機状態にする。

エネルギーがスカラカンになってもボーデヴィツヒが攻撃を続けようとしたので、山田先生が急いで止めに入ってくれて事なきを得た。

俺とオルコット、ボーデヴィツヒは織斑先生に怒られ出席簿攻撃を食らってしまった。明らかに痛がっているのはオルコットだけだが。

真逆な転校生 4

……この部屋に何か用だろうか？

夕食終わり、何時ものようにベッドの上で休憩していると部屋の入り口の方からガチャッと鍵を開ける音が聞こえてきた。

この部屋の鍵は俺と寮長しか持っていないと思ったのだが。前同居人の筈が持っていた鍵は既に回収されているので。

「邪魔します」

恐る恐る入ってくる人物は控えめな挨拶をしてくる。

「えっと、同じ部屋で過ごすことになったシャルルです」

今度の同居人はシャルル・デュノアらしいが生憎、寮長から話は全然聞いていない。

まあ、どうでも良いか。どうせ、そこまで関わり合うこともないんだから。

デュノアが荷解きをしている間、手伝う気の欠片もない俺はベッドの上から動くことなくいた。ずっと仰向けの体勢で天井を見つめている。意味もなくズーッと。

「ごめんね。うるさかったかな？」

荷解きを終えたデュノアはわざわざ俺の顔を覗き込んでくる。

柔らかな笑顔で覗き込んできたデュノアを眺める。もしかしたらデ

ユノアではなく、いまだにその先の天井を見つめているのかも知れない。

「……別に」

少しずつ脳に浸透してきた眠気に俺は言葉を装飾しないままに口にする。

愛想の悪い俺の受け答えに対してもデュノアは嫌な顔一つせずにした。

こう言うのを器がでかいつて言うんだな。

また一つ実感することが出来た俺は目を閉じて記憶を飛ばすことにした。

翌日の午後。アリーナの一角で俺は箒と戦っていた。もちろん、生身ではなくちゃんとISを展開してでの戦い。俗に言う練習試合である。

少し離れた位置に鈴音とデュノアが待機している。

鈴音は何時もの試合風景なので何とも思っていないが、デュノアはこの試合風景に驚きを隠せていない。

デュノアからしてみれば専用機持ちの俺と練習機で戦う箒がどっこいどっこいの試合を展開しているのが信じられないのだろう。普通に考えれば専用機持ちが試合を優位に進める。なのに現状は均衡を保っている。しかも、段々と俺が押され始めているのだから驚愕以外にないだろう。

「また、私の勝ちだな」

「箒の剣筋を出し抜けた例がないからな」

箒の目にも留まらない刃がいとも簡単に俺のシールドエネルギーを空にする。

これで全戦全敗伝説が継続されるみたいだ。どうやら機体の性能で強さが決まる訳ではないらしい。

俺と箒が並んで鈴音の元へと歩を進める。

「相変わらず負けみたいね」

「ああ。勝てないな」

「勝とうと思っていないのなら仕方ないのではないか？」

「そうなのか？」

「まあ、やる気も必要だから間違いじゃないわね」

「……ところで」

「何よ」

「どうしたのだ、十夏？」

「デユノアは何故固まっている？」

「大方、アンタが弱いからビックリしてるんじゃない」

「ふん。固定観念に囚われているからだ。情けない」

「ISについて何にも知らなかったド素人に何を期待しているんだ？」

「確かに」

「そうね」

やはり、この二人と会話するのが一番良い。気が置けない友達だからだろうか？

ISを待機状態にして地に足をつける。

「な、何でもないように会話しないでよ!？」

ようやく復活したデュノアが慌てた顔で叫ぶ。

何か気に障ることを言ってしまったのか？ もしそうなら、他の集まりに参加するなり何なりしてくれれば良い。別に君に居て欲しいなんて一言も言っていないから。

「十夏はクラス代表だね？ もう少し強くても良いのじゃないかな」

そのようなルールを聞いたことがないな。

箒と鈴音に目配せをすると首を横に振られる。どうやら強くなければならないと言う強制はないようだ。

「鈴音さんは中国の代表候補生なんだし、十夏に色々教えた方が良いと思うよ」

デュノアは鈴音の方に目を向けて提案してくる。

「基礎は授業で習えば良いと思うからあたしの方では教えないの。とにかくがむじやらに戦って雰囲気だけでやっていけばいいんじゃない？」

「いやいや。そんな放任主義じゃ駄目だと思うよ。きっとそこまで強くなれないよ」

けろりと言つてのける鈴音にデュノアは乾いた笑みで応える。

「別に強くなりたいと望んでないからどうでも良い」

ISで飯を食つていこうとはこれぼっちも考えていない俺に強さはいらぬ。力に恐怖するなんて漫画の主人公によくある葛藤がある訳じゃなく、現実問題でいらぬ。普通に就職して普通に働ければ良いと思う。普通の生活に行き過ぎた力など不要なのだから。

「ほ、ほら。ないよりはあつた方が良いんだから強くなつて損はないと思うよ」

どうしてデュノアは必死になつて俺に力を渴望させたがるのだろうか？ 同じ男だから周りに舐められたくないのか。兎も角押し付け勘弁。

俺達三人がデュノアの言い分を適当にあしらっていると、辺りで練習していた生徒達がざわついているのに気がついた。

「面倒な予感がする」

不穏な空気を携えて黒いISがゆっくりと迫つてきていた。

真逆な転校生5

場の雰囲気ガラリと変わる錯覚。それを感じさせてくれるのは目の前で此方を値踏みするかのように見てくるボーデヴィツヒだ。

先ほどまでせつせと練習に励んでいた生徒達は拳って距離を置いて見学を決め込む。専用機持ちのやり取りに巻き込まれたくないのだから。懸命な判断だ。

「何の用よ、ドイツの」

ボーデヴィツヒから発せられる気配に触発された鈴音がISを展開する。

その瞳に敵意が宿っており、今すぐにでも飛びかかろうとしている。

「中国、フランスの専用機が如何ほどの性能か知りたくてな。私とシュヴァルツエア・レーゲンを相手にまともに張り合うことが出来るかどうかを」

プラズマ刃を発生させて構えるボーデヴィツヒに鈴音も双天牙月を回転させ始める。

シャルルもISを展開。瞬時に武器を生成して狙いを定めて戦闘態勢を整える。

最初に動いたのはボーデヴィツヒ。スラスターを全開にして接近戦を仕掛ける。

鈴音はその場から動かずに受けて立つつもりらしい。代わりにシャルルが手に持ったアサルトライフルで攻撃を始めるが、高速で向かってくる弾丸の群れをボーデヴィツヒは最小限の動きで全て通り過ぎていく。

減速することもなく鈴音の懷まで入り込むボーデヴィツヒのプラズマ刃。鈴音は双天牙月を切り離して対応する。流れるような動作で放たれる剣捌きを苦もなく防いでいくボーデヴィツヒ。

鈴音の攻撃を防いでいたボーデヴィツヒは何かに気づいて間合いを広げると、先ほどまでいた場所を弾丸が通りすぎていく。

「ボクがいることを忘れないでほしいな」

続けて狙い撃つデュノア。

「忘れてなどいない。気に留める必要がなかったただけだ」

ワイヤーブレードで全てを叩き落とす。

人間離れた技の前にデュノアが怯んでしまった。

その隙をボーデヴィツヒが逃すことはせず、急速接近を開始する。デュノアが気がついた時にはワイヤーブレードがアサルトライフルは串刺しにされていた。

「……くっ!？」

アサルトライフルを手放した瞬間にショットガンを展開。一、二秒は時間がかかる武器の展開を一瞬で済ませることが出来るのだからデュノアは凄い部類に入るのだろう。

しかし、ボーデヴィツヒの方が凄いと言うべきか、一呼吸の内に放たれた散弾を避ける。

「速いが……遅い!!」

ボーデヴィツヒは巧みにワイヤーブレードを操り、デュノアの両手を縛り上げてレールカノンを何発も浴びせる。シールドエネルギー

が無くなるまでレールカノンが轟音を響かせ続けた。

デュノアがリタイアしたので後は鈴音だけ。素人の俺から見ても勝率は低いと分かる。

「織斑十夏。キサマも戦え。どうせ、中国のも大したことはないのだからな」

急にかかる指名が面倒だ。蹴りたいところではあるが、このままだと鈴音がなぶり殺しにされてしまうかも知れない。俺が参加してもボーデヴィツヒの勝ち揺るがないが、せめて鈴音が攻撃を受けすぎないよう弾除け程度なら出来る。

白色を展開して雑種を構える。

「昨日も今日も大変だな」

鈴音に合わせるようにボーデヴィツヒへと突撃する。

左右からの攻撃。しかし、ボーデヴィツヒは淡々と向かえ撃つただだった。

ワイヤーブレードを俺の迎撃に回して本体は鈴音の剣を受け止める。

「食らいなさい!!」

ボーデヴィツヒとのつばぜり合いに負けて吹き飛ばされた鈴音は肩部装甲をスライドさせて衝撃砲を放つ。視認することが出来ないそれは真っ直ぐボーデヴィツヒを狙って……俺に命中する。正確にはワイヤーブレードに捕らえられた俺がボーデヴィツヒの盾にされたのだ。決して鈴音のフレンドリーファイアではない。

衝撃砲に命中した俺はボーデヴィツヒの方向へ吹き飛ばされ、レールカノンを食らって鈴音の方へ吹き飛ばされた。……忙しくて大変だ。

鈴音の隣まで飛ばされて行き、そこで体勢を立て直すと唐突に白色の装甲がスライドしていき赤い粒子を散布し始める。赤い粒子は初めて見るな。

「これって一体何な訳？」

ISと自身の髪が段々と赤く染まっていくのを見ながら鈴音が疑問を口にする。

「俺にも分からない」

今俺が認識している事実だけを言葉にする。ただ、青色や緑色みたいに何かしらの能力があると確信している。

色々考えなくてはいけないのだから、迫り来るボーデヴィツヒを無視してまでやらなければならないことではない。

鈴音が迫るボーデヴィツヒに切りかかる。

ボーデヴィツヒが右のプラズマ刃で受け止めるが、先ほどとは違いつばぜり合いに勝利したのは鈴音だった。

「力が増したと言うのか」

ボーデヴィツヒが言うには赤色は力が上がるみたいだ。単純ゆえに役に立つ能力であろう。相手との実力差が大きく開いていなければ。

「だが、それだけだ!!」

単純な力以外の全てが勝っているボーデヴィツヒに勝てる訳もなく鈴音はやられた。

次は俺で、ワイヤーブレードが一斉に襲い掛かってきた。一本なら兎も角六本も出されては対処出来ない。四方八方から切り刻まれて

後、ワイヤーで捕らえられ手繰り寄せられる。

抵抗することも出来ないままボーデヴィツヒの元まで来ると殴られた。強い衝撃が体に走る。

「キサマはどうして痛みや敗北に顔を歪めないんだ」

殴る殴る殴る。

「私の力の前に屈しろ。その顔に恐怖を表せ」

殴る殴る殴る。

「私を恐れる。私に勝つことは出来ないと絶望しろ」

殴る殴る殴る。

「やめろーっ!!」

遠退いていく意識の中で殴る音以外で最後に聞いた音が箒が発する怒りの声であった。

殴る殴る殴る。——殴る。

敗者の思考 1

「今は貴女と戦う気はない。専用機を持っていない、同じ舞台上がつていない貴女を倒しても私がブリュンヒルデに勝利したことはならないからだ」

廊下の壁に叩きつけられた私をボーデヴィツヒが嘲笑する。私よりも小さい体に、細い腕に……これも簡単に負けるとは。

一夏が死んで、私の元には十夏しかいなくなつた時に全てを犠牲にして得た力がこんな小娘の前に齒が立たないなんて。振り返りもせずに廊下の向こう側へと消えていくボーデヴィツヒを睨みつけることしか出来ないなんて。

医務室に十夏が運び込まれたと聞いて急いで向かつた時のことだ。

医務室へたどり着くと痛々しい姿でベッドに横たわる十夏とその周りを囲んでいる面々を確認することが出来た。今は十夏以外の存在に注意を向けることに時間を割きたくないなので、無視して十夏の近くまで行く。

視界に映る十夏の顔には痣が幾つも出来ていた。

「……一体何があつたのだ？」

十夏を傷つけられたことで沸き起こる怒りを必死に抑えながら原因について周りに問いかける。

デュノアについては知らないが、凰と篠ノ之は何時も一緒になつて行動しているから何があつたかも全てその眼で見ているはずだ。犯人を聞き出して相応の処分を与える。例えばそれが職権乱用であつても。……いや、此処まで生徒を危険に晒したのだ。正当な処分であ

って決して職権乱用ではない。

——ん？

「聞いているのか？」

……誰も何も語りはしない。

篠ノ之は目を瞑り沈黙したまま。何時も後ろで一纏めにしていた髪はおろされた状態であった。

凰は拳を手のひらに何度も打ち付けることを繰り返している。手のひらが赤くなっていくのも気にせずに。

デュノアは二人の様子にどう対応したら良いか分からず困惑している。

「えーっと、織斑先生。実は……ボク達がアリーナで訓練していた時に、ボーデヴィツヒさんがやってきて——」

「大体の内容は分かった」

「——はい」

犯人が分かった以上、此処に長いをする必要はない。

今すぐにでもボーデヴィツヒを探し出さなくては。

私は溜め込んだ怒りを開放するために医務室を出て行き、ボーデヴィツヒを捕らえに廊下をゆっくりと歩いていく。更に怒りを溜め込む時間を稼ぐように。

「声もかけずに出て行ったわね」

医務室の扉を一瞥してから、眠り続ける十夏に視線を戻す。
痣だらけの痛々しい顔を撫でてあげたいんだけど、下手に触って何かあったらいけないので今は我慢する。たぶん箒も同じ気持ちだ。
互いに十夏のことが好きだからそんな気がする。

パシン！！　パシン！！　パシン！！

圧倒的な強さだった。十夏の模様替えで強化されていた甲龍にも関わらず負けてしまうくらいに。

高速で向かってくる弾丸をしっかりと見えていたに違いない。それでもなければワイヤーブレードで全てを叩き落とすことなんて不可能なんだから。しかも、視認することが出来ない衝撃砲までも見えていた。

見えない攻撃を避けるのなら大きな動きで避ければ良い。なのにアイツは最小限の動きだけで不可視の弾丸を避けたんだ。

——化け物。

それとも……改造コードでも使ったのかな？　例えば——。

パシン！！　パシン！！　パシン！！

——あの赤い魔法使いみたいな。

「声もかけずに出て行ったわね」

静かな医務室に鈴音の批難するような声が響く。

織斑先生が十夏に何も言わずに出て行ったのが気に食わなかったのだろう。私はその態度に慣れているので気にしないが。

目を開けて十夏の顔を良く見ると酷い痣が至るところにあるのが理解出来る。

私は無力。どうしようもなく無力だ。

一方的に十夏を殴り続けるボーデヴィツヒを殺してやると全神経を集中させて打鉄を走らせた私。

振り上げた近接戦闘用のブレードに殺意を込めて込めて込めて――。

「やめろーっ!!」

――避けられた。

渾身の一撃はあっさりと回避されてしまった。込められた力に反して本当にあっさりと。

ブレードは虚しく空を切り裂き、黒い装甲を切り裂く音ではなく風を切る音が耳に入ってくる。

「力を持たないキサマなどに興味はない」

歯牙にもかけずと言った具合にボーデヴィツヒはISを解いてアリナを後にした。

はらりと髪留めが切り裂かれていたことに気がついたのはボーデヴィツヒが完全に見えなくなった時だ。

私は無力。どうしようもなく無力だ。

十夏を支えると誓ったのにこのザマだ。

……専用機があれば少しは変わっていたのだろうか？

勝てないにせよ、一矢報いることくらいは出来たのではないか？

所詮は過ぎたことだ。もう意味はない。

今は十夏が無事に目覚めるのを待つしかない。

私が十夏を支えるのだから。

敗者の思考2

目の前には鏡がある。とても大きな鏡。俺の体が全部写るほどの鏡だ。

俺が手を上げれば、鏡に写る俺も同じタイミングで手を上げる。

当たり前だ。自分の姿が反射して見えるだけなのだから、今更驚くことではない。

状況が分からないので、ひとまず周囲を見渡す。

現在立っているところで一回転して出した結論は一つ。

至るところに鏡があって全方位から俺を反射している。まるで俺の全てを写し出そうとしているみたいに。

あの時、ずっと見続けた夢にそっくりだ。

目の前の鏡に右の手のひらを近づける。すると鏡に写る自分も同じように手を伸ばして重ねてくる。同じ動作と同じ速度。一切のブレがない。

鏡越しに重ねられた手のひらを動かさずに、ただ眺める。

向こう側に立つ自分がポーカーフェイスを崩して泣き出したりしても、此方側の自分は表情一つ変えることなく眺める。

向こう側が何かを訴えるように懸命に口を動かすのを黙って眺める。

「どうして俺を生き返させてくれなかったんだよ」

昔と一語一句違わない台詞を俺の声で言葉にする。

どうして生き返させなかったのかと問われたら、一体どう返せば良いものか？ 死者が生き返るのは自然の流れに反している？ 俺の心の中で生きているから生き返らす必要がない？ 他人なんかより

も自身の願いを優先する？

幾つもの例を挙げることが出来るのだが、そのどれが正しい答えなのかは分からない。

一番近い例を選ぶならば、他人なんかよりも自身の願いを優先するだと思っ。

鏡の向こうから俺を責める俺を見つめる。

反射でしかない俺は好き勝手にベラベラと言葉を吐き出し続ける。

よくもそんなに言葉を並び立てることが出来るな。俺には出来ないが、そこに嫉妬する気もない。

「生き返らせる生き返らせる生き返らせる生き返らせる生き返らせる生き返らせるイキカエラセロイキカエラセロイキカエラセロ」

周囲を囲む鏡の全てに写る俺が壊れたように同じ言葉を投げつけてくる。

耳障りな音を聞きながら俺はその場に座り込んで言葉の嵐が過ぎ去るのを待つことにした。

暗いと言うことをぼんやりと認識出来た。

どうして暗いのか何故暗いのか？　じつくり考えようとして思考の海に沈もうとする。しかし、その前に答えを見つけたので今回は海に行くのを止めよう。

ゆっくりと目を開けて視覚を覚醒させる。

見えるのは何の飾り気のない天井。手を伸ばせば触れられるんじゃないかと錯覚させてくれるが、実際に手を伸ばしても触れることは出来ないだろう。

「気がつきましたか？」

横から声をかけられる。声が女性のものであると理解するのにそこその時間がかかってしまった。

よほど長い時間眠り続けたのだろうか？ 頭が上手く働かない。

考えることは後ににて、今は顔を声のした方向に向けて、その人物が何者であるかを知ることにする。

顔を向けて映りこむ人物は礼儀正しく折りたたみの椅子に座っているが、見た目がとても変だ。

長い白髪を基礎として所々を赤、青、黄、緑色にしたおかしな配色の髪。左右の眼は紫色をしているので、たぶんカラーコンタクトだ。膝の上に置いてある手の甲は右には刀が折れた絵が彫っており、左には黒字で『GENIUS』と彫られており、その文字に赤色でバツテンがしてあった。

「お加減はどうですか？」

……センスが変人だ。

「特には……」

「そうですね。それは良かった。私は君のIS『白色』の開発担当をした者です」

見た目で実力は測れないと言うが、ここまで測りにくい人物はそうはいないと思う。

「今回、君のISの破損状態があまりに酷くなってしまったと言うことで君が眠っている五日間、私の方で修復作業をさせてもらいま

した」

ボーデヴィツヒに殴られて五日間も眠っていたのか。どうりで体の節々が痛む訳だ。

「ありがとうございます」

「いえ。ではこれが白色です」

汚れ一つない白色のブレスレットをベッドの横に備え付けられている引き出しの上に置いてくれる。

もう用事が済んだのか、立ち上がり椅子を折りたたんで元あった場所に返しに行く。

「それでは私はこれで失礼します」

俺に対して浅く頭を下げながら医務室の出入り口へと歩を進める。

「あ。一つだけ言っておきたいことがありました」

扉の前でクルリと振り返った女性。

「ISで戦うんですから、力を得ることに貪欲になったらどうですか？」

とてもどうでも良い提案を口にした女性は足早に医務室を去っていた。

……とりあえずもうひと眠りしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1290y/>

I S 裏方の赤い人

2011年12月7日01時57分発行